日本語諸方言に見られる形容詞語幹の長母音

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/3859

金沢大学文学部論集　言語・文学篇
第27号　2007年　37～84

日本語諸方言に見られる形容詞語幹の長母音

新　田　哲　夫

要　　旨

本土方言にはターケー，ターキャなど，語幹に標準語では現れない長母音をもつ形容詞が存在する。この形式は新潟県中部北部，長野県秋山郷，石川県白峰，島根県隠岐西ノ島，大分県国東半島付近，和歌山県田辺市（旧日高郡，西牟婁郡）付近などに離れて分布している。本稿では，これらの特徴を記録した先行資料を整理し，筆者による5地域の記述調査の概要を示す。また，得られた結果から通時的考察を行う。そこでは，これらの形容詞に見られる長母音について，(a)短母音が長音化したという仮説と(b)長母音は短母音より古く，長母音が現れる方言ではそれが保持された，という二つの仮説を提示し検討する。筆者の結論は，音変化の自然さと地理的分布を主たる根拠として(b)長母音保持の仮説を支持するというものである。ただし和歌山県田辺市の事例は，(a)の蓋然性があることを述べる。また，長母音に関連する促音（高い：タッカイ），撥音（甘い：アンマイ）をもつ形式もいくつかの方言で現れるが，それらは長母音から発生した可能性についても述べる。

1. はじめに

これまでの本土方言の形容詞研究では，その地域差を問題とするとき，活用の違いが中心的な話題であった。例えば「高い」という語の場合，タカイ対タカカの語尾の違いやタカクナル対タコーナルのウ音便の有無などが取り上げられてきた。本稿では，それとは異なり，語幹の違い，特にそこに長母音が現れるかどうかに注目する。すなわち，標準語でタカイのように語幹の第1母音が短母音で現れるものが，方言においてはターケー，ターキャなど，そこに長母音が現れるものを扱う。また，これらの長母音との関連で，語幹に促音・撥音をもつヤッスイ《安い》，ナンガイ《長い》などの事例についても言及する。

本稿がこれから示すように，語幹にこのような長母音をもつ形容詞は，いくつかの方言では多数の語に及び，また地理的な広がりを見せる。しかしながら，このような標準語にない語幹の長母音をもつ形容詞（以後，これを単に「語幹の長い形容詞」という）はこれでまであまり注目されなかったようだ。その原因の一つには，これらの語形が一種の強調形，あるいは音象徴（sound symbolism）的な現れと見なされ，ときには臨時的な形として処理されてきたのではないかと推察される。だが，本稿で取り上げる先人の記述や筆者の調査したデータを見ると，それらがパラ言語的（paralinguistic）な強調

様式の問題ではなく，狭義の言語的（linguistic）な問題，すなわち形容詞語幹の「語形」そのものの共時的・通時的問題であることが明らかになるかと思う。

本稿では，本土方言に現れるこれらの「語幹の長い形容詞」および促音・撥音をもつ形容詞に関して，先行研究の整理を行い（2 節），この現象が現れる 5 地域の方言の共時的な姿の概略を述べる（3 節）。次にこれらの長母音とそれに関連する促音・撥音についての通時的な考察を行い，仮説を提示する（4 節）[1]。

なお，方言に見られる「語幹の長い形容詞」は標準語 3 拍の形容詞に出現し，4 拍以上のものにはほとんど現れない。ここでの考察は標準語 3 拍で，もともと語幹に長母音をもたない形容詞が中心的な対象となる。

本稿で取り上げる主な地点を図 1（論文末）に示す。図中の太字は，本稿の記述の節で取り上げる主な地点である。

2. これまでの記述

この節では，語幹の長い形容詞がどのように取り上げられ，記述されてきたのかを全国規模の資料と各地の記述にわけて整理する。

これまでの全国規模の資料，例えば『方言文法全国地図』や『日本言語地図』の地図記号の与え方を見ると，「語幹の長い形容詞」に対応する記号の選定にあたり，専用の形や色を与えられてないことから，この特徴がいくつかの方言間に共通するものであるという認識は薄かったように思う。また，各地の方言記述においても，他の地域でも散見する共通特徴という認識は無論なく，その形容詞語形が当該方言の目立った特徴の一つとして重視されることも極めて少ない。このような状況下，「語幹の長い形容詞」について，この観点からまとめた資料を再構成して提示するのも意義があることと思う。

2.1 全国規模の資料

2.1.1 『方言文法全国地図』(GAJ) 第 3 巻

『方言文法全国地図』(以下 GAJ) で本稿の考察の対象になるのは，136 図「高い(物)」，137 図「高くない」，138 図「高くて」，139 図「高くなる」，141 図「高かった」，142 図「高いだろう」，143 図「高ければ」，144 図「高いなら」の資料である。語幹の長母音が現れた地点とその語形を表 1（論文末）で示す。データはそれぞれの地図の他，別冊『方言文法全国地図解説 3　付 資料一覧（活用編 I・II)』(以下「GAJ 資料一覧」) に依った。表 1 の語形の先頭にあるチェック印は語幹の長い語形である。なお，石川県白峰方言については，他方言との比較のため，新田の資料を加えた。

表 1 に見られる長母音の分布域は，新潟県諸方言，長野県下水内郡栄村（秋山郷）方言の他に，島根県隠岐郡西ノ島町，大分県姫島村，宇佐市にある。このうち，新潟県村

上市，五泉市，刈羽郡小国町［現長岡市 2005.4 合併］，長野県下水内郡栄村，また新田の調査による石川県白峰村［現白山市 2005.2 合併］で全ての活用形に長母音が現れている。活用形ごとでは，広範に長母音が見られるものの，136 図「高い（物）」，137 図「高くない」，142 図「高いだろう」において，やや少ない出現数となっている。

表 1 にはあげてないが，GAJにおけるTAGG-などの促音の分布域[2]は，山形県酒田市飛島，酒田市一番町，飽海郡八幡町［現酒田市 2005.11 合併］，最上郡戸沢村，北村山郡大石田町，寒河江市である。山形県の日本海側と東北部に分布する。

図 2（論文末）では，促音の分布域も示した。長母音を○印で，促音を▽印で表している。促音の分布域は，新潟県の長母音地域と隣接していることが注目される。

2.1.2 『日本言語地図』（LAJ）第 1 巻

LAJ で考察の対象となる語形は「アマイ／カライ／アライ／アカイ／フトイ／ホソイ／コマイ」に対応する語である。これらの語形は，38 図「（塩味が）薄い」，37 図「甘い」／40 図「辛い」，39 図「塩辛い」／27 図「粗い」／28 図「赤い」／20 図「太い」／24 図「細い」／22 図「小さい」，25 図「細かい」の項目に現れる。語幹の長母音が現れた地点とその語形を表 2 に示す。なお，表 2 では，促音（撥音はない）が現れる地点はあげていない。例えば HUTTOI，HUTTEE，HUTTE は山形県，宮城県，岩手県に多く見られるが，出現地点は 80 を越え，表に示すのは煩雑になるためである。

図 3（論文末）では，上記項目のなかで，語幹の長母音（●印）が 1 例か 2 例以上出現するか，大きさで分けて示した。

表 2，図 3 では，語幹の長母音が GAJ よりさらに広い範囲で見られる。新潟県，大分県国東半島付近と GAJ で示されなかった石川県白峰村，三重県志摩半島の先端付近，岡山県西大寺市に複数の項目が見られ，鳥取，広島，兵庫，岐阜，福岡，熊本，千葉各県に一項目の分布がある。項目別では「細い」の出現が目立つ。項目によって出現しない地域があるが，これはその地域で対応する 3 拍語以外の別の語形が現れる場合も含んでいる。例えば，《塩辛い》は，新潟県北部では SIOKKAREE，中越付近では SYOPPAI など，カライ以外の語形が分布する。これらは表 2 では空欄となっている。

促音については，図 3 で「細い」と「太い」の項目の分布をおおまかに示した。「細い」の促音形（HOSS-）が山形県を中心に分布し，「太い」の促音形（HUTT-）は，それを含み込むかたちで，より広範に拡がっている。

2.1.3 『現代日本語方言大辞典』

新潟市方言，佐渡方言，秋山郷方言他で，これに該当する多数の語を拾うことができる。ここにあげるのは，一つの基礎語彙の項目にあげられた各方言の見出し語である。各見出し語の説明には，各方言の活用形の記載もあるがここでの引用では割愛した。ま

た，そこで振られたアクセント記号も割愛した。

◎山形県余目町:クーレー《黒い》

◎新潟県新潟市:アーウェ《青い》，アーセァ《浅い》，アーメァ《甘い》，ウーセ《薄い》，カーテ《固い》，カーリ《軽い》，クーレ《黒い》，クーレァ《暗い》，サーメ《寒い》，シーベ《渋い》，ターケァ《高い》，ナーゲァー《長い》，ニーゲァ《苦い》，ハーイェ《早い》，ヒークイ《低い》，ホーセ《細い》，ヨーウェ《弱い》，ワーケァ《若い》

◎新潟県畑野町・新穂町[現佐渡市 2004.3 合併]:アーオイ《青い》，カーテー《固い》，キーツイ《きつい》，サーミー《寒い》，ヒーレー《広い》，ホーセー《細い》，マーリー《丸い》，ヨーウェー《弱い》

◎長野県栄村(秋山郷):アーウェー《青い》，アーケァー《赤い》，コーレー《黒い》，セーベァー《狭い》，ターケァー《高い》，ナーゲァー《長い》，フェーコエ《低い》，フーレー《広い》，ホーセー《細い》，マーレー《丸い》，ヨーウェァー《弱い》

◎石川県金沢市:カールイ《軽い》，マールイ《丸い》

◎千葉県多古町:マールイ《丸い》

◎神奈川相模原市:ナーゲー《長い》，ホーセー《細い》

◎和歌山県有田市:マールイ《丸い》

◎高知県高知市:ヒーロイ《広い》，ホーセー《細い》，マールイ《丸い》

新潟市の項で重要な情報がある。それは4拍語に現れる長母音である。「明るい」と「短い」の2語に見られる。

◎ 新潟県新潟市: アカリ《明るい》，アカール，アカーリとも，アカールナッタ
ミジケァー《短い》，ミージケァナル，ミージケァバ

この辞書に記載されている他の4拍語・5拍語には現れていない（アブネァー《危ない》，カナシー《悲しい》，オトナシー《おとなしい》，タノシー《楽しい》，アタラシー《新しい》，セワシー《せわしい》，メズラシー《珍しい》など)。すぐ後に示すが，上記のような4拍（以上）の語に語幹の長母音が見られるのは新潟市（とその周辺）の方言だけである。

2.2 各方言の記述研究と方言集

2.2.1 新潟県諸方言

新潟県は他県と比べて，この現象に関して最も資料の多い県である。これはGAJ，LAJで広範な分布が見られることからも頷ける。

(a) 吉田澄夫(1931)

吉田(1931)は新潟県の「語幹の長い形容詞」の記述としては最も早いものである。吉田氏は1902年新潟市生まれであり，氏自身の出身地の資料と思われる。ここでは，形容詞連用形のところで例外なしにウ音便になることが述べられている。ク活用ではナゴー

（長く），ハヨー（早く），ヒロー（広く），ヨー（よく），ノー（無く），シク活用ではアタラシュー（新しく），ヒサシュー（久しく），セワシュー（忙しく）の例があげられ，さらに

「そのやうに発音されることもあるが，尚更に発音の変化を来してゐる。それはク活用の場合には，語の第一音節が長音化して，終りの音節は短音化してゐる。ナゴーはナーゴ，ハヨーはハーヨ，ヒローはヒーロの如く発音され，シク活用の場合には，語の第二音節が長音化してアタラシューはアターラシュ，ヒサシューはヒサーシュ，セワシューはセワーシュの如く発音されるのである。そしてむしろこの方が多く用ゐられる。」(p.36)

とある。これらの語幹の長母音は，連用形のウ音便で生じた長母音から変化したものと捉えているためか，強調という記述はない。また，他の活用形（例えば終止形）について長音化があるかどうかの言及はない。

このなかで，標準語 4 拍以上のシク活用形容詞「新しい，久しい，忙しい」で長母音が現れる記述は注目に値する。こうした例は実は珍しく，後に述べる諸方言では原則 3 拍語に限られる。また，「新しく」がアターラシュであり，アタラーシュではないことも留意したい。

(b) 竹内三一郎(1954)

竹内(1954)は新潟県西蒲原郡和納村上和納（旧岩室村和納［現新潟市 2005.3 合併］）方言の記述のうち，形容詞活用に関するものである。

形容詞の基本形，条件形（～バ），推量形（～カロー），タ形（～カッタ），ナル形（～ナル）の複数の活用形に長母音が現れている（下線部）。以下の引用のまとめは新田によるもの。長母音が強調という記述は特にない。

◎「長い」(ai 型)

ドーシテ ソンガニ ナーガカローバ。ソンガエニ ナーガカツタ カ。モーエツシヤク《一尺》{ナーガ，ナーゴ}ナルト エーンダドモ。コノキユーリ《胡瓜》ワ ナーガエ(ナエ)。ナーガエ キユーリダナエ。モーチート ナーガエバ エードモ。

他にセーマエ《狭い》，ターカエ《高い》の語も同様。

◎「寒い」(ui 型)

サームカロー，サーム(サーメ)カツタ，サームエ(サーメ)，サームエ(サーメ)コト，サームエバ。

サーブエ，サーベとも。

◎「黒い，白い」(oi 型)

シロナル，クロナル；シーロナル，クーロナル；シローナル，クローナル。

「シーロ」「クーロ」が普通の言い方。

(c) 加藤正信(1962)

加藤(1962)は新潟県諸方言の動詞・形容詞のウ音便を扱った論文であるが，列挙され

た形容詞の語例に長母音が見られる（表 3 下線部）。地点名のあとの括弧は話者の西暦の生年である。語幹の長い形容詞は下越（県北部）・中越（県中部）に分布する。

表 3 加藤(1962)に見られる語幹の長い形容詞

地点＼語例	高くて	高くなる	白くて	白くなる
岩船郡山北村寒川(96)	ta:go'de	ta:gona'rɯ	si:ro'de	si:rona'rɯ
岩船郡山北村府屋(10)	ta:gɛgo'de, ta:go'de	tagɛ'na'rɯ, ta:gona'rɯ	si:ro'de	si:rona'rɯ
岩船郡関川村大島(87)	ta:go'de	ta:go'narɯ	siro'de	si:rona'rɯ
岩船郡関川村金丸(92)	tago'de	tagona'rɯ	si:ro'de	sirona'rɯ
新津市草水(12)	ta:ko'te	ta:kona'rɯ, ta:kɛna'rɯ	ʃi:ro'te	ʃi:rona'rɯ
五泉市馬下(07)	ta:go'de	ta:gona'rɯ, ta:gɛna'rɯ	siro'de	si:rona'rɯ
長岡市長田(02)	ta:kɔ'te	ta:kɔna'rɯ	ʃi:ro'te	ʃi:rona'rɯ
長岡市滝谷(07)	ta'kakɯte	ta:kana'rɯ	ʃi'rokɯte	ʃirona'rɯ
小千谷市山寺(95)	ta'kakɯte	takakɯna'rɯ, ta:kana'rɯ	ʃi'rokɯte	ʃi'rokɯnarɯ

(d) 劔持隼一郎(1964)，安藤潔(1997)

劔持(1964)は岩船郡粟島浦村方言の記述報告で，そこには「ターゴーネエー《高くない》，ターゲ《高い》」の 2 例が見られる。

安藤(1997)は同方言の語彙集と語学的，歴史・民俗学的な論考で，以下を記録する。

「ふーぎィ《低い》」(p.278)

「は(ー)いェ(ー)《早い》，た(ー)けェ(ー)《高い》，すィ(ー)れェ(ー)《白い》，か(ー)りィ(ー)《軽い》」(p.290)

1 番目の例「ふーぎィ《低い》」の「ふ」は無声両唇摩擦音＋中舌母音を写したものであろう。2 番目の例の第 1 音節，第 2 音節とも長音化はオプションであるような表記であるが，「たーけェー，たーけェ，たけェー《高い》」が現れ得る形で，両方とも短い「たけェ」は出現が少ないと予想される。

(e) 都竹通年雄・早川宏・渡辺綱也(1974)

都竹・早川・渡辺（1974:43)には，事例の具体的な説明はないが，新潟県の形容詞の地図が示されている。「ク活用形容詞の第 1 拍の母音が伸びたもの，例，サーメ（寒い)」が中越を中心に 7 地点，「ク活用形容詞の第 2 拍に促音が入ったもの，例，フッテ（太い)」が 3 地点見られる。長母音に注目して地図化した最初のものと思われる。

(f) 上野善道(1984)

上野(1984)は新潟県村上市（旧村上市内）方言のアクセントの記述報告である。周辺部の山辺里，岩船，上海府の各旧村の記述も含む。以下は村上市内のうち旧村上町（町人

町）の「暗い」の例で，「/ クーレァ（終・体），クーロ（なる，ない），クーロカッタ（終・体）/」とある(p.374)。

(g) **渡辺富美雄(1992)**

渡辺(1992)は，先にあげた『現代日本語方言大辞典』第1巻の新潟市の記述である。「終止形では長音化現象がある。［クーレ］（黒い），［トーウェ］（遠い），［ナーゲー］（長い）となる」とある（p.146r)。

(h) **大橋勝男(1998)**

大橋(1998)『新潟県言語地図』は新潟全県をカバーする研究成果である。その中の形容詞項目で語幹の長い形容詞が見られる。

Map 4「赤い」:アーケ(岩船郡関川村大島)

Map 236「粗い」:アーレー(新潟市窪田町)

Map 209「うすい」:アーマイ(中条町桃崎浜[現胎内市 2005.9 合併]), アーメー(新潟市寺尾, 佐渡郡新穂村上大野[現佐渡市 2004.3 合併]), アーメ(山北町北中), ウーセー(新潟市窪田町), ウースイ(新潟市小針台)

上記の他にも Map 235「細い」で見られる語幹の長母音は分布域が広く，ホーソイが下越，中越を中心に16地点，ホーセが中越を中心に9地点ある。

また，ウ音便を見る項目 Map 27「高くなる」，Map 28「安くなる」では，さらに多くの語例と地点を見いだせる。大橋(1998)の形容詞の分布図は，もともと語尾や音便の違いを描くもので，語幹の長母音に注目した作図ではない。Map 27「高くなる」，Map 28「安くなる」について，大橋(1998)の同図を語幹の長母音に注目して書き直したものを図4，5（論文末）で示す。白地図は大橋(1998)の地点図を利用した。

図4，5では，●○■□△の大きい記号がターコー，ターコ，ヤースー，ヤースなどの「語幹の長い形容詞」，斜め線／を用いたものが非ウ音便形タカク・ヤスクの類を示すのが原則である。両図とも類似の分布を見せる。すなわち，語幹の長い形容詞は，中越と下越を中心に分布することがわかる。さらに図5で佐渡にヤースが3地点（両津市両尾，佐渡郡新穂村上大野，佐渡郡小木町田野浦［以上現佐渡市］），上越にも早川上流部の糸魚川市大平と姫川谷の糸魚川市山之坊に見られる。

これら二つの図で重要な点は，これらの現象とウ音便の分布とがほぼ重なることである。ただし，非ウ音便でありながら語幹の長い形容詞であるヤースクが図5で3地点（岩船郡関川村大島，新発田市上荒沢，南蒲原郡田上町下吉田）ある。また，促音のヤッスクが1地点（中頸城郡清里村赤池［現上越市清里区 2005.1 合併］）見られる。

2.2.2 山形県庄内方言

(a) 井上史雄(2000)

GAJの資料（図 1）やLAJでは山形県に語幹の促音の分布が見られる。井上(2000:455)によれば，庄内地方にはヒッギ《低い》，アッゲ《赤い》，カッデ《固い》，フッケ《深い》，サンミ《寒い》，アンメ《甘い》など，形容詞語幹の音韻に関連して促音，撥音が現れるという。これらの語幹の形式と音韻の関係は，後に示す高知県，和歌山県の条件と同じである。さらに，井上(2000:236-241)では，語幹の例として「高い」TAGGA-ないしTAGGEA-，「暗い」KUURA-ないしKUUREA-が示されている。「暗くない」の事例では，この地域で無活用化とともに，クレ→クーレの語幹の 3 音節化が起こった[3]と述べている(p.237)。

(b) 新田哲夫(1994)

拙論(1994)は鶴岡方言アクセントの記述であるが，一部，形容詞の記事を含む（原文の音素表記をカナ表記に改める）。旧鶴岡市の話者（1927 年生，女）で，アッゲァ《赤い》，アッセァ《浅い》，アッズ《厚い》，ウッス《薄い》，オッセ《遅い》，カッデァ《固い》，ホッシ《欲しい》，サンムイ《寒い》，チッケァ《近い》，フッケァ《深い》が見られる。なお，第 2 拍に/ r /の音をもつ語は，クレァ《暗い》，シレ《白い》，ヒレ《広い》など短い語幹で現れる。それより若い話者（1937 年生，男）では，先にあげた促音・撥音が全て消えて，アゲァ《赤い》，アセァ《浅い》などのように実現している。なお，より高年層の話者（1925 年生，男）では，「白い」でシーレ[si:re]の長母音が現れることが注目される（p.100）。

2.2.3 長野県秋山郷方言

長野県下水内郡栄村屋敷（秋山郷）方言については，GAJ や『現代日本語方言大辞典』において語幹の長い形容詞の記録（馬瀬良雄氏による）が見られる。その語数は多く，ほとんどの 3 拍形容詞が長音化しているといっていいほどである。しかしながら，この方言についての詳細な記述である馬瀬(1982, 1992)では，これついて特に言及がない。『現代日本語方言大辞典』に記載されている形容詞をまとめたのが表 4 である。アクセントを“] ”で示す。アクセントの現れ方に若干不統一があるが，そのまま引用する。

表 4 長野県下水内郡栄村屋敷（秋山郷）の形容詞

	基本形	ナル形		条件形	併用の基本形
青い	アーウェー]	アーオ]コナロ,	アーウェ]コナロ	アーウェケ]バ	アウェー]とも
赤い	アーケァー	アーカコナ]ロ,	アーケァコナ]ロ	アーケァケ]バ	アケァーとも
黒い	コーレ]ー	コーロ]コナロ,	コーレ]コナロ	コーレーケ]バ	コレ]ーとも
狭い	セーベァー]	セーバ]コナロ,	セーベァ]コナロ	セーベァケ]バ	セベァー]とも

高い	ターケァー]	ターカ]コナロ,	ターケァ]コナロ	ターケァケ]バ	タケァ]ーとも
長い	ナーゲァー]	ナーガ]コナロ,	ナーゲァ]コナロ	ナーゲァケ]バ	ナゲァー]とも
低い	フェーコエ]	フェーコ]コナロ		フェーコエケ]バ	
広い	フーレー	フーロコナ]ロ,	フーレコナ]ロ	フーレケ]バ	フレーとも
細い	ホーセ]ー	ホーソ]コナロ,	ホーセ]コナロ	ホーセーケ]バ	ホセ]ーとも
丸い	マーレー	マーロコナ]ロ,	マーレコナ]ロ	マーレーケ]バ	マレーとも
弱い	ヨーウェァー]	ヨ]ワコナロ,	ヨウェァ]コナロ	ヨウェァケ]バ	ヨウェァー]とも

表 4 では，辞書の見出し語が「語幹の長い形容詞」，その併用形で短母音のものをあげてある[4]。一方，見出し語になく，説明の中に併用としてあげられているもの（例えば，“【 サベー] 《寒い》 】, サ]ボコナロ・サベ]コナロ, サベケ]バ, サーベー]とも”とあるもの）も多数ある。併用の記事を拾って列挙すると次のようになる。

アーメァー（甘い），アーセァー（浅い），オーセー（薄い），エーゴ]エ（えぐい），オーセー（遅い），カーレァ]（辛い），カーレー（軽い），サーベー]（寒い），シーレー]（白い），フーレー]（古い）

この方言の語尾や語幹末母音[5]の融合の在り方には規則性が見られる。GAJやこれまでの馬瀬(1992)の報告によれば，基本形の語尾融合の変化は，ai＞ɛ:，oi＞e:，ui＞oe, e: のようになる。

テ形は，GAJによれば-kodeの語尾[6]（標準語の～クテに対応）をもち，表 4 のナル形と同様，2 種の語幹に付く（例えばta:kakode, ta:kɛkode）。

これらをまとめると次の表 5 のようになる。「語幹 1」は語幹末母音が長母音となる独立した語幹で，「語幹 1'」は「語幹 1」の語幹末母音の短い形である。これも独立した形の一種で，馬瀬(1982, 1992)では，この語幹をもつことを「無活用化」と呼んでいる。なお，語幹 2 は独立していない語幹である。

表 5 長野県下水内郡栄村の形容詞語幹末母音

語幹（用いる活用形）＼標準語語幹	ai の語幹	oi の語幹	ui の語幹
語幹 1（基本形）	ɛ:	e:	oe, e:
語幹 1'（条件形-keba，ナル形-konaro，テ形-kode）	ɛ	e	e
語幹 2（ナル形-konaro，テ形-kode）	a	o	o

さて，問題となる語幹の長母音については，表 4, 5 にある全ての活用形に現れている（表 1 の資料でも全ての活用形に現れる）。ただ，表 4 に併用形の記載もあるように，短母音の形も同時に存在する。これらの新旧については，GAJ 資料一覧が参考になる。以下のように示されている。「高い」のテ形については「takakode, ta:kakode誘注，ta:kɛkode古」(p.431)，その注として「ta:kakodeは〈昔の年寄りが使った〉」(p.794)とあり，ナル

形については「takakonaro, ta:kakonaro古」(p.431)とある。ta:kakode, ta:kakonaro の長母音形はこの方言の古い層に属していることがわかる。表 4 の「高い」の例では，ターケァー]，ターカ]コナロ，ターケァケ]バが，古い時代の最も優勢な語形だったようだ。

筆者は 2003 年 6 月に秋山郷を訪れたが，小赤沢（話者 1919 年生，男）では長母音の語形を使用せず，また聞いたこともないという。また，和山（話者 1924 年生，男）では昔の人が使っていたのを聞いた記憶がある，自分で言うとしたら“強調”していうとき ta:kɛkke:《高かった》，sa:bukke:《寒かった》というかもしれないという話である。秋山郷方言では，「語形」としての「語幹の長い形容詞」は，現在ほぼ消滅したか消滅しかけていると言えよう。

なお，長野県下水内郡栄村屋敷（秋山郷）方言では，4 拍形容詞については長母音化する例を見い出し得なかった。

2.2.4 石川県白峰方言

白峰方言は北陸の中では徹底した長母音をもつ方言であるが，地理的な分布域がきわめて限られ，組織的に現れるのは石川県ではここだけである。

(a)『ＮＨＫ全国方言資料』

『NHK 全国方言資料　第 3 巻 東海・北陸編』の「石川県白峰村白峰」は 1956 年の録音である。以下の引用は拙論(2004a)によって改訂した。

◎サルドシワ トシガ ワーリ チューケットカ《申年は年が悪いというけれど》(p.127, [1893 年生，男])

◎ワーキャ シューニ マカシテオロッテ《若い人たちにまかせていましょうって》(p.129, [1892 年生，女])

(b) 岩井隆盛(1959, 1962)

岩井(1959, 1962)は『白峰村史』の中にある方言記述である。岩井(1959:439)で 6 語の語例があげられ，同書(1962:300-302)では，多数の形容詞を語尾にしたがって，「あい類」，「うい類」，「いい類」，「おい類」に分類し，それぞれどのような形式をとるのか整理している。ターコナッタ（高くなった），カートナッタ（固くなった）などの連用形の記述もある。

(c) 新田哲夫(2002)

拙論(2002)はアクセントも含めた形容詞活用全体の記述で，資料を付している。白峰方言についてはこの記述をもとに 3 節で詳しく述べる。

2.2.5 島根県隠岐方言

島根県隠岐方言については，この件に関する個別の記述情報が少ない。GAJ，LAJの他，『NHK全国方言資料 第8巻 辺地・離島編Ⅱ』に1例見られるだけである。いずれも島前（どうぜん）の西ノ島町のものである。

◎島根県西ノ島町（にしのしまちょう）黒木字宇賀（うか）方言

サービダケン クビ テノゴ マイテ《寒いものだから首に手ぬぐい巻いて》(p.294, [1890 年生, 男])

2.2.6 大分県方言

(a) 『姫島村史』

姫島村史編纂委員会編(1986)『姫島村史』の第9編「方言，地名」第1章「姫島の方言」(pp.429-451)には17語があげられている。語末母音においては，ai >eː，oi > eː，ui > iː の母音融合が見られる。

◎あーえー《青い》，あーけえ《赤い，明るい》，あーちい《熱い，暑い》，ええぎい《えぐい》，きいねえ《[きない]黄色い》，こうえー《[こわい]疲れた》，さーでえ《[さどい]すばしこい》，さーびい《寒い》，じーりい《[じるい]平気》，だーいい・だーりい《だるい》，つうえー《強い》，なーげえ《長い》，ぬーりい《ぬるい，おそい》，ねーべえ《粘い》，はーえー《早い》，やーええ《[やわい]柔らかい》，わーりい《悪い》

(b) 松田正義・日高貢一郎(1996)，松田正義・糸井寛一(1993)，松田・日高(1993)

松田・日高(1996)『大分方言30年の変容』には次の記述がある。

「短音長呼の傾向が，宇佐・国東や西部方言などにある。例：ターケー（高い），ツーイー（強い）。逆に長音短呼の傾向は全県的に弱い」（大分県方言の特徴，同書 p.20）「オーシー（遅い）・エーレー（偉い）のような，3 音節の形容詞を引きのばしていう傾向」（宇佐市長洲方言，同書 p.350）

「アーケー・シーリー・オージー（恐ろしい）・ヌーキー（暖い）のように，引きのばす発音は西国東郡の名物ですが，豊前にもこの傾向はあります」（西国東郡（にしくにさき）真玉町（またままち）上真玉［現豊後高田市 2005.3 合併］，同書p.409）

また，松田・糸井(1993)『方言生活 30 年の変容　上巻』，松田・日高(1993)『方言生活 30 年の変容　下巻』は，約30年の間隔をおいて収録された二つの時代（上巻は1950年代，下巻は 1980 年代）の談話資料であるが，そこでも宇佐郡長洲町（ながすまち）方言，東国東郡国東町［現国東市 2006.3 合併］方言，東国東郡姫島村方言，西国東郡真玉町方言などで，用例を見いだすことができる。一部を抜粋する（下線部は新田による）。

◎宇佐郡長洲町：フンナー　モー　オースナッタキー《それじゃ，もう遅くなったから》（老年男，上

巻p.322)

◎東国東郡国東町:ウーン アーケノコー ツクッチョッタホデー 《うん，赤いのばかり(をこそ)作っていたから》(老年男，下巻p.30)

◎東国東郡姫島村:ウーン ホナー アン ターケーケド イッピキ マケチャンデーコー 《うん，じゃあ，あの，高いけど一匹まけてやるから》(老年男，下巻p.50)

◎西国東郡真玉町:オムタヨリー ハーヤカッタナー 《思ったより早かったなあ》(老年女，下巻p.477)

(c) **西田祐史**(1995)

西田(1995)は大分大学教育学部に提出した卒業論文である。松田・糸井(1993)，松田・日高(1993)の記述を踏まえ，この現象について，大分県北部西部 23 市町村で 74 名を調査し，県内の地域差・世代差を明らかにしている。出現の頻度が高い順で，西国東郡真玉町，同香々地町［以上 2 町豊後高田市 2005.3 合併］，東国東郡国見町［現国東市 2006.3 合併］，豊後高田市，宇佐市，速見郡山香町［現杵築市 2005.10 合併］，宇佐郡院内町，同安心院町［以上 2 町現宇佐市 2005.3 合併］，中津市にこの現象が見られる。活用形は未然形（～ウ），連用形（～ナッタ，～タ，～テ，～ナイ），終止形（言い切り，～デス，～ノ［疑問］），連体形（～体言），仮定形（～バ），語幹＋ソウダが調べられている。～ウ，～タ，～バ，語幹＋ソウダの出現が他と比べて少ないことが示されている。

2.2.7 和歌山県方言

和歌山県の形容詞の特徴は，1933 年（昭和 8 年）に出版された二つの資料で確かめることができる。一つは(a)『和歌山縣方言』であり，もう一つは(b)與田左門「紀北地方の形容詞」である。古い時代の和歌山県内の方言の様子を映す，大変有益な資料である。

(a) **『和歌山縣方言』**

和歌山縣女子師範學校・和歌山縣日方高等女學校(1933)『和歌山縣方言』は，70 年以上も前の方言集であるが，収録語数，地点数とも充実した内容を収める。本書の前半にあげられている「和歌山縣方言の特徴」においては，

> 形容詞の最初の短母韻を長母韻とす。アアオイ 青い，タアカイ 高い。
> 形容詞に促音を入れる。アツカイ 赤い，キツツイ きつい (p.15 下段)

とある。形容詞の長母音と促音の形が方言特徴の一つとして考えられている。特にこれらが強調という記事はない。

方言集本体には，17 語の語幹の長い形容詞（下線部）と 15 語の促音・撥音の形容詞が記録されている。**表 6** に現れた例を音韻環境に分けてあげた。見出し語と地域名は原著表記のままである[7]。

表 6 『和歌山縣方言』の語幹の長い形容詞

/k/										/r/					
赤い	アアカイ	市	海		有	日	西	東		辛い	カアライ		海	那	伊	有	日	西	
赤い	アツカイ	市	海		有		西	東		軽い	カアルイ	市						西	東
高い	タアカイ		海	那	伊	有	日	西	東	暗い	クウライ	市			伊		日	西	
高い	タツカイ	市	海	那		日		東		黒い	クウロイ	市	海		伊			西	
近い	チイカイ							西		荒々しい	ゴウツイ	市						西	
近い	チツカイ	市	海		有	日	西			新しい	サアライ				伊	有		西	
低い	ヒツクイ	市	海	那	伊	有	日	西	東	ぬるい	ヌウルイ			那					
深い	フツカイ	市	海	那		有	日	西		古い	フウルイ						日		東
狡猾い	スツコイ								東	丸い	マアルイ							西	
/t/, /c/										/ ʼ /									
固い	カツタイ	市	海	那	伊	有		西	東	青い	アアオイ	市	海	那	伊	有	日	西	東
太い	フツトイ	市								/m/, /ŋ/									
暑い	アアツイ					有	日	西		重い	オオモイ							西	
厚い	アアツイ					有	日	西	東	甘い	アアマイ	市	海			有	日	西	
暑い，厚い	アツツイ				伊			西	東	甘い	アンマイ			那	伊	有	日	西	東
/s/										長い	ナンガイ	市	海					西	
薄い	ウツスイ	市	海	那	伊	有	日	西	東	苦い	ニンガイ		海	那	伊				
細い	ホツソイ	市	海		伊	有	日	西	東	市: 和歌山市，海: 海草郡，那: 那賀郡，伊: 伊都郡，有: 有田郡，日: 日高郡，西: 西牟婁郡，東:東牟婁郡									
易い	ヤツスイ	市	海	那	伊	有	日	西	東										

促音・撥音・長母音の現れは，2 拍目の子音の性質に依存している。阻害音（破裂・破擦・摩擦音/k, c, s/）では促音，鼻音（/m, ŋ/）では撥音が現れ，他の音の流音（/r/）や母音（/ ʼ/）が連続するとき長母音が現れる。問題の中心である長母音は，2 拍目の子音が阻害音（この資料では摩擦音を除く）と鼻音の音韻環境でも現れ，タアカイとタツカイ，アアマイとアンマイのように二つの形をもつものも示されている。

長母音，および促音・撥音をもつ形容詞の県内の地理的分布には大差は見られないが，西牟婁郡，日高郡，有田郡などの紀伊半島南西部に比較的多く現れている様子である。

この方言集の語例には，アツコニ「赤く」，ユウルニ「緩く」，クウロウ「黒く」も散見し，連用形でもこれらの形が現れたことを窺わせる。

この方言集で特記すべきことは，標準語 5 拍「美しい」でウウツクシイ（日高郡，西牟婁郡），ウツツクシイ（西牟婁郡）の語例が見られることである。これらは長母音，促音形を指す。新潟市方言以外の他の方言では，標準語 3 拍以外で現れる例は珍しく，この 2 例は特異なものである。

(b) **與田左門(1933)**

與田(1933)「紀北地方の形容詞」は『土の香』9-1に載るガリ刷りの手稿である。母音と子音の長音化の例が示され，アクセント（高い部分を示す文字上のバーを，[ ]で囲む表記に改める）が付されている。「長音化によってその形容詞の意味を強める方法は形容詞にもある」(p.5) とあり，「強調」の一種と見ているようである。

母音の長音化

クー[ロ]イ(黒い)	シー[ロ]イ(白い)
アー[カ]イ(赤い)	トー[ワ]イ(遠い)
テー[サ]イ(小さい)	サー[ラ]イ(新らしい)等々

子音の長音化

アッ[サ]イ(浅い)	アン[マ]イ(甘い)
ワッ[カ]イ(若い)	チッ[サ]イ(小さい)等々 (pp.5-6)

長母音は，/r/（クーロイ，シーロイ，サーライ），/w/（トーワイ）の流音・わたり音のsonorant の前だけでなく，/k/（アーカイ），/s/（テーサイ）の阻害音の前でも現れている。また，撥音は，/m/（アンマイ）の鼻音の前で現れる。

和歌山県の広い範囲で，形容詞アクセントは2種があるが，これらの語例では1種しか現れていない（非長母音の場合は[ク]ロイ HLL と [アカ]イ HHL など)。本文では，

> 「此処にはアクセントを付けて見たが面白い事には，之等のアクセントは普通の日本式の，pitch accent ではなく，西洋式の stress accent である事である」(p.6)

とある。stress accent かどうかの真偽はともかく，通常の弁別的アクセント以外の要素が加わったものとみることができる。強調に用いられるアクセントの実現を記述したものであろう。

(c) **村内英一（1982，1959)**

村内(1982)「和歌山県の方言」でも，この現象は強調の形式という見解である。

> 「また，強調して言うときに長音化するということもあり，「赤い」を「アーカイ」，「高い」を「ターカイ」などと言う。ただし，強調のためには促音を挿入して「アッカイ・タッカイ」ともなる。」(p.175)

とある。阻害音のとき，長母音と促音が現れることが示されている。撥音の例はない。

村内(1959)の東牟婁郡高池町（古座川町）[現田辺市 2005.1 合併] では，「高く砂を積め」の「高く」に対する形容詞の副詞形として，「タコ，タコー，タコーニ，<u>ターコ</u>，<u>ターコニ</u>，タカニ，タカーニ，<u>タッカニ</u>」の例があげられている。下線部（新田による）に語幹に長母音，促音をもつ形が見られる。

2.2.8 愛媛県周桑郡方言

杉山正世(1930)『愛媛縣周桑郡丹原地方言語集 第二稿本』は愛媛県周桑郡丹原［現西条市 2004.11 合併］だけでなく，今治市，越智郡，新居郡氷見町，新居郡（新居郡全体を指すものか？），伊豫郡，喜多郡大洲町の情報もある。謄写版ガリ刷りの手稿である。

この方言集であげられている語は 3 語である。

アーカィ《赤い》〔今治も〕，ターカィ《高い》〔大洲も〕，ヒークイ《低い》〔大洲も〕

わずか 3 語だけであるが，語幹の第 2 拍に/ k /という阻害音をもちながら長母音で現れる例が愛媛県に存在する（した）証拠として意味がある。なお，これに対応する促音をもつ例は見えない。また，撥音をもつものはコマイ《小さい》に対応するコンマイが見られるだけである。これらに特に強調という記事はない。

2.2.9 高知県方言

(a) 服部四郎(1933)

服部(1933)「アクセントと方言」の第二章の註に，高知県土佐郡一宮村徳谷［現高知市 1932.6 編入］方言の形容詞の記述が見られる。アクセント記号の上線の部分を[ ]で囲んで引用する。

「高知県土佐郡一宮村徳谷方言では，形容詞に，二種の形とアクセントを有するものが多い。(後者は意味が強い)〔[アカ]イ，アッ[カ]イ〕(赤)，〔[タ]カイ,タッ[カ]イ〕(高)，〔[アツ]イ，アッ[ツ]イ〕(厚)，〔[カタ]イ，カッ[タ]イ〕(堅)，〔[ク]サイ，クッ[サ]イ〕(臭)，〔[ナ]ガイ，ナン[ガ]イ〕(長)，〔[アマ]イ，アン[マ]イ〕(甘)，〔[シ]ロイ，シー[ロ]イ〕(白)，〔[ハ]ヤイ，ハー[ヤ]イ〕(早)，〔[ヨ]ワイ，ヨー[ワ]イ〕(弱)，〔[アオ]イ[8]，アー[オ]イ〕(青)。この中，促音・撥音を含むものの方が，長母音のものより強い感じがすると云う。」(pp.20-21)

服部(1933)の記述から，促音，撥音，長音の現れ方が第 2 拍目の子音に関係していることがわかる。第 2 拍目の子音が，/ k, t /の破裂音・/ s /の摩擦音・/ c /の破擦音の阻害音のとき促音が，/ m, ŋ /の鼻音のとき撥音が，/ r /の流音，/ j, w /のわたり音，母音ゼロのとき長母音が現れる。また，これら長音節になったときには，HHL と HLL のアクセントの対立が中和して，LLHL の一つになることがわかる。

(b) 土居重俊(1958)

土居(1958)『土佐言葉』は，高知県方言の全体の詳細な記述である。本書に形容詞の長母音，促音，撥音の報告がある。

土居(1958)では，県内の地域差および「強調」に関して，次の指摘をしている。すなわち，「高知県にはカルイ《軽い》・カタイ《固い》・ナガイ《長い》というほかに，（1）カールイ・カッタイ，ナンガイという地域と，（2）カルーイ・カターイ・ナガーイとい

う地域がある。（1）は高知市およびその周辺，（2）は大豊郡，幡多郡その他で使用される。これらは「大体固定的習慣的」であるが，やはり強調して言う場合に長音化することは争えない」(p.68, pp.194-195）という。

また，上記（1）の地域では，先の服部(1933)の報告と同様の関係が見られる。本書にはクーロイ《黒い》，ヨーワイ《弱い》，チッカイ《近い》，カックイ《角い》，ナンガイ《長い》の例を見いだせる。なお，（2）の地域については，音韻条件とは無関係に第2音節の母音が延びるという報告である。

これらの形式のアクセントについても記事がある。高知市方言では 3 拍形容詞 HHL（「軽い」など）と HLL（「長い」など）の区別があるが，カールイなどの（1）の地域においては，この第1音節が長音節の形式は，アクセントの対立が消失して，全て LLHL になる。なお，カルーイなどの（2）地域では，ともに LHHL で実現するという (p.120)。アクセントについても，（1）の地域については先の服部(1933)の記述と同じである。

このように高知県方言における形容詞の音韻条件と長音節の関係，長音節をもつ形式でのアクセントの中和は，先に述べた和歌山県諸方言と共通する点がある。

2.2.10 その他の方言

中井幸比古(2002)には，松谷輝一『舞鶴地方に於ける方言の一考察』(1936)からの語例で，アーオイ，カーライ，カールイ，ターカイ，ニーガイが見えるが，筆者は原書については未見である。この語形が，地理的に新潟県と隠岐をはさむ日本海側で見られるのは注目すべきであろう。

先にあげた服部(1933)には氏自身の出身地三重県亀山方言の例，「[ア]ッカイ，[ウ]ッスイ，[ス]ーイ」がくだけた会話に多く現れることが示されている (p.18)。「あっぱれ，やっぱり，あんまり，おんなじ，まんま（儘）」と同様に，強調の形式がたびたび用いられることで固定し，言語の体系の中へ摂取された例としてあげられている。[9]

3. 主要方言の記述

この節では，語幹の長い形容詞が現れながら，異なる活用体系をもつ 5 地域 6 つの方言の記述を行う。主として取り上げるのは，

新潟県岩船郡関川村朴坂（いわふね せきかわ ほおさか）

石川県白山市白峰方言［旧石川郡白峰村字白峰］（はくさん しらみね）

大分県宇佐市安心院町飯田［旧宇佐郡安心院町飯田］（う さ あじむ まち はんだ）

島根県隠岐郡西ノ島町赤之江（おき にしのしまちょう しゃくのえ）

和歌山県田辺市龍神村宮代［旧日高郡龍神村宮代］（りゅうじん みやしろ）

和歌山県田辺市熊野［旧西牟婁郡大塔村熊野］（ゆや にしむろぐん おおとうむら）

である。最後の二つはまとめて述べる。

方言の形容詞記述を行う前に，語幹の種類を分類しておく。標準語形ではイを取ったものを語幹と定め，語幹末に現れる音韻の種類によって，a 語幹，u 語幹のように呼ぶ。これらの分類は，方言の語形と標準語の語形との対応を見るときに必要なものである。

a 語幹 ..... 語尾 i の前の語幹末母音が a のもの　（「暗い」「高い」「少ない」）
u 語幹 ..... 語尾 i の前の語幹末母音が u のもの　（「軽い」「安い」「明るい」）
o 語幹 ..... 語尾 i の前の語幹末母音が o のもの　（「青い」「黒い」「鋭い」）
si 語幹 ..... 語尾 i の前の語幹末音が si のもの　（「欲しい」「悲しい」「恥かしい」）

これからの各方言の形容詞の記述にあたっては，語幹の他に「語基」というレベルも設定しておく。各活用形の最も小さい共通部分を「語幹」というのに対して，「語基」は，語幹に付属する交替母音も含んだもう少し大きな単位と定める。後に示す新潟県関川村方言を先取りして例に取ると，ku:rɛ-ro《暗いだろう》，ku:ro-naru《暗くなる》の共通部分ku:r-が「語幹」，ku:rɛ，ku:roが「語基」としておく。この方言のように，語幹の後に融合母音が生じるときの，語尾を取り除いた形式に対して，「語幹」とは別の名前を付けておく必要がある。基本形ku:rɛは語基に語尾ゼロが付いたものということになる。なお，「活用形」という用語は，語基に活用語尾が接続した語形全体を指す。

以下の記述に用いる語形の表記は，関川村方言および白峰方言では，音素表記[10]で行う。標準語にない音声や統一的な語幹表示の理由による。他の方言では表音式のカナ表記を用いる。音調記号はL=低，M=中，H=高，R=昇を表す。

3.1 新潟県関川村方言

新潟県岩船郡関川村朴坂方言の形容詞について述べる。話者は 1935 年生まれの男性である。表 7 で活用体系を示す。アクセントは 2 種，無核（0）と有核（3）である。無核は句頭がやや高くなる句音調が被さる。上野善道(1984:373)の旧山辺里村タイプと類似のものと見た。表中「3a-0 暗い」とは，「暗い」が 3 拍，a語幹，アクセント 0 という意味である。

全般的な活用体系の統合の在り方を見る。

a 語幹「暗い」と o 語幹「黒い」が全く同じ活用をする。また，u 語幹の一部「安い」がそれに合流している。他の u 語幹「軽い」と si 語幹「欲しい」が同じ活用をする。主な活用の種類はこの 2 種である（'i:《良い》，nɛ《無い》は別）。

表 7 新潟県関川村方言の形容詞体系

	3a-0 暗い	3o-3 黒い	3u'-3 安い	3u"-0 軽い	3si-3 欲しい
基本形	ku:rɛ	ku:rɛ	ja:sɛ	ka:ri	ho:ʃi
	MMM	LLH	LLH	MMM	LLH
条件形	ku:rɛba	ku:rɛba	ja:sɛba	ka:riba	ho:ʃiba
	MMML	LLHL	LLHL	MMML	LLHL
推量形	ku:rɛro	ku:rɛro	ja:sɛro	ka:riro	ho:ʃiro
	MMLH	LLHR	LLHR	MMLH	LLHR
テ形	ku:rode	ku:rode	ja:sode	ka:rode	ho:ʃode
	MMML	LLHL	LLHL	MMML	LLHL
ナル形	ku:ronaru	ku:ronaru	ja:sonaru	ka:ronaru	ho:ʃonaru
	MMLHL	LLHLL	LLHLL	MMLHL	LLHLL
カッタ形	ku:rogaQta	kurogaQta	ja:sogaQta	karogaQta	hoʃogaQta
	MMMLLH	LHLLL	LLHLLL	MMLLH	LHLLL
否定形	ku:ronɛ	ku:ronɛ	ja:sonɛ	ka:ronɛ	ho:ʃonɛ
	MMLH	LLHR	LLHR	MMLH	LLHR

語幹の長母音に触れる前に，語基の種類について整理しておく。

標準語a語幹とo語幹に対応するこの方言の語基末母音の交替は，ɛ～o（ku:rɛ～ku:ro）である。もう一つの語基末母音の交替は，i～o（ka:ri～ka:ro）である。

u 語幹は u'と u"の二つにスプリットしている。この分かれ方は第 2 音節の子音の性質に関係していると思われる。a 語幹 o 語幹に合流している u' 語幹には，ja:sɛ《安い》のほか，no:gɛ《ぬくい》，'aQcɛ《熱(暑)い》，'a:zɛ《厚い》，hi:gɛ《低い》があり，si 語幹に合流している u" 語幹には，ka:ri《軽い》のほか，sa:bi《寒い》，si:bi《渋い》，'agari《明るい》がある。u' 語幹に属するものは対応する標準語で/ k, c, s /の無声子音をもち，u" 語幹に属するものは対応する標準語で/ r, b /の有声子音をもつ。

基本形，条件形，推量形（「M活用群」と呼ぶ）は同じ語基末母音をもつ。テ形，ナル形，カッタ形，否定形（「P活用群」と呼ぶ）は同じ語基末母音をもつ[11]。

M 活用群では，語基に母音ɛ, iが現れ，P 活用群では，全ての形容詞で母音oのみが現れる。前者に用いる語基は単独でも用いることができ，「独立語基」と呼べるものである。それに対して後者は単独では存在できず，「拘束語基」と呼べるものである。

以上，語基末母音の現れをまとめると表 8 のようになる。

表 8 新潟県関川村方言の形容詞語基末母音

語基＼標準語語幹	a 語幹 o 語幹 u' 語幹	u" 語幹 si 語幹
独立語基（M 活用群に用いる）	ɛ	i
拘束語基（P 活用群に用いる）	o	

さて，語幹の長母音については，ほぼ全ての活用形に現れるといえる。すなわち，「独立語基」，「拘束語基」の双方に現れる。ただし，カッタ形，特にそれが有核の語形のときに現れにくい傾向にある（kurogaQta「黒かった」，karogaQta「軽かった」，hoʃogaQta「欲しかった」）。そこでは，長母音が現れるかどうか話者も迷うことが多かった。再調査すれば，併用形が出る可能性，あるいは長母音形が否定される可能性もある。なお，標準語 4 拍以上の語には長母音は現れない。

これまで記述の対象としてきた話者（1935 年生）より若い世代（1958 年生）では，長母音が阻害音の促音に変化している。すなわち，「高い」では ta:gɛ ＞ taQgɛ，「安い」では ja:sɛ ＞ jaQsɛの変化が起きている。語幹の長い音節を保ちながら，音の実質を長い母音から長い子音へと変化させたものである。実のところ，古い形の持ち主も，新しい形の持ち主もこの変化に全く気づいていなかった。長母音と促音の語形が変化の途上にある現実は，語幹の長母音が（パラ言語的なものでなく）言語的要素として確実なものであること，また，「長母音＞促音」が起こり得る変化モデルとして，他の方言でも想定し得ることを示している。

3.2 石川県白山市白峰方言

石川県白山市白峰方言について述べる。話者は 1925 年生まれの女性である。表 9-1，9-2 で形容詞体系を示す。表中 3a-kは 3 拍a語幹，アクセントkを示す。この方言の形容詞アクセントは下降式(k)と非下降式(0)の 2 タイプである（新田 2002）。否定形(-nai)は表にないが，ナル形と同一の語基をとり，アクセントも同じである（ka:to-nai HHMMM《固くない》など）。

表 9-1 石川県白峰方言の形容詞体系(1)

	3a-k 固い	3a-0 高い	3u-k 軽い	3u-0 安い
基本形	ka:tja	ta:kja	ka:ri	ja:si
	HLL	HLL	HLL	HLL
ナル形	ka:tonaru	ta:konaru	ka:runaru	ja:sunaru
	HHMMM	HHHHH	HHMMM	HHHHH
テ形	ka:tote	ta:kote	ka:rute	ja:sute
	HHLL	HHHL	HHLL	HHHL
カッタ形	ka:takaQta	ta:kakaQta	ka:rukaQta	ja:sukaQta
	HHMMLL	HHHHLL	HHMMLL	HHHHLL
条件形	ka:takerja	ta:kakerja	ka:rukerja	ja:sukerja
	HHMML	HHHHL	HHMML	HHHHL

表 9-2 石川県白峰方言の形容詞体系(2)

	3o-0 黒い	3si-0 欲しい	4a-k 重たい	4u-k 明るい
基本形	kuroi	ho:si	'obotja	'akari
	HLL	HLL	HLL	HLL
ナル形	ku:ronaru	ho:sinaru	'obotonaru	'akarunaru
	HHHHH	HHHHH	HHMMM	HHMMM
テ形	ku:rote	ho:site	'obotote	'akarute
	HHHL	HHHL	HHLL	HHLL
カッタ形	ku:rokaQta	ho:sikaQta	'obotokaQta	'akarukaQta
	HHHHLL	HHHHLL	HHMMLL	HHMMLL
条件形	ku:rokerja	ho:sikerja	'obotokerja	'akarukerja
	HHHHL	HHHHL	HHMML	HHMML

まず基本形について，標準語との対応を示す。表 9-1，9-2 にない語例も補足し全体を述べる。C は任意の子音，V は任意の母音である。

表 10 標準語と白峰方言の対応

標準語		語例	白峰方言	語例
3 拍 a 語幹	CVCai	「固い，高い」など	CV:Cja	ka:tja, ta:kja
3 拍 u 語幹	CVCui	「軽い，安い」など	CV:Ci	ka:ri, ja:si
3 拍 si 語幹	CVsii	「欲しい」	CV:si	ho:si
4 拍 a 語幹	CVCVCai	「重たい，少ない」など	CVCVCja	'obotja, sukunja
4 拍u語幹	CVCVCui	「明るい」，(へだるい[12])など	CVCVCi	'akari, hedari
4 拍 si 語幹	CVCVsii	「嬉しい，悲しい」など	CVCVsi	'urisi, kanasi
3,4 拍 o 語幹	-oi	「黒い，青い，鋭い」など	標準語と同じ	

白峰では o 語幹をのぞく標準語 3 拍語の場合に，第 1 母音が長母音で現れる。語末は融合や母音脱落によって標準語より短くなるが，長母音が現れることで標準語 3 拍形容詞は白峰でも 3 拍の拍数が保たれる。

標準語との対応関係をまとめれば次のようになる。白峰方言の基本形の語末音の種類から，形容詞を ja 形容詞，i 形容詞，oi 形容詞，si 形容詞と命名し分類する。

a 語幹… ja 形容詞　(ka:tja, ta:kja, sukunja)
u 語幹… i 形容詞　(ka:ri, ja:si, 'akari)
o 語幹… oi 形容詞　(kuroi, 'a'oi, surudoi)
si 語幹… si 形容詞　(ho:si, 'urisi, kanasi)

語末音の対応については，標準語 3 拍，4 拍ともに同じ原則が働く。標準語 4 拍語の基本形は，語尾の融合や母音脱落によって多くが 3 拍になっている。5 拍以上の単純語の場合は，標準語と同じ形のことが多い（「ありがたい，情けない，新しい」など）。

しかし，対応には例外がある。ho:sja《細い》，'o:sja《遅い》の 2 語で，標準語 o 語幹でありながら，白峰では ja 形容詞で現れている。「弱い，こわい《固い，疲れている》」のように wai で終わる語は，jo:ja，ko:jaとなる。

白峰方言の ja 形容詞，i 形容詞，oi 形容詞，si 形容詞の各活用における語基末音は表 11 のようになる。

表 11 石川県白峰方言の形容詞語基末音

白峰形容詞(標準語語幹) 語基の種類	ja 形容詞 (a 語幹)	oi 形容詞 (o 語幹)	i 形容詞 (u 語幹)	si 形容詞 (si 語幹)
独立語基（基本形）	Cja	Coi	Ci	si
拘束語基 A（ナル形，テ形，否定形）	Co	Co	Cu	
拘束語基 B（カッタ形，条件形）	Ca			

「独立語基」は基本形で用いられる他に，この方言のノダ形に相当する～ヤ，～ジャが接続する。「拘束語基 A」はウ音便によって生じた母音が短母音化した由来をもち，「拘束語基 B」はもともとの語幹の裸形(bare form)である。拘束語基 A，B の区別は ja 形容詞だけがもつ。oi 形容詞，i 形容詞は独立・拘束語基の区別のみを行い，si 形容詞は区別がなく一つの語基しかない。

さて，問題の長母音は，標準語 3 拍形容詞に対応するもので，o語幹の独立語基を除く全ての語基に現れる。いいかえれば，この方言のoi形容詞の基本形だけが長母音が現れない。なお標準語 4 拍以上の形容詞では現れない[13]。

この方言の長母音をもつ形式には強調の意味は全くなく，「通常」の形である。katjaのような短い形も存在しない。「通常形」ka:tjaを強調のコノテーションを帯びて発音してもらうと第 1 母音がさらに長く高くなるか，まれに息漏れ（breathy）などの二次的発声が加わるだけである。

共通語では「あ，イタ（痛）！」，「おー，サム（寒）！」のように語幹そのもので感嘆を表す強調様式がある。白峰方言ではこれに該当する様式は，ja: 'i:ta，ja: sa:bu（ja:はこの方言の感嘆語）で拘束語基 B を用いる。ここでも第 1 音節の長母音は現れる。ただし，この強調様式では，アクセントの対立が見られない。すなわち，ja: ka:ta (3a-k 固い)，ja: ta:ka（3a-0 高い）ともに HH HHH で現れ，非下降式アクセントに中和されている。

3.3 大分県安心院町方言

大分県宇佐市安心院町飯田の形容詞体系について述べる。話者は 1923 年生まれの男性である。

表 12 で形容詞体系を示す。表中 3a-3 は 3 拍 a 語幹，3 は基本形アクセント，3a-0 の

0 は基本形のアクセントが無核型である。推量形 1 は「～だろう」に対応し，推量形 2 はカリ活用に「～う」がついたものである。

表 12 大分県安心院町方言の形容詞体系

	3a-3 高い	3a-0 固い	3o-3 白い	3u-3 安い	3si-2 欲しい
基本形	ターケー	カーテー	シーリー	ヤーシー[14]	ホシー
	MMHL	MMMM	MMHL	MMHL	LHL
推量形 1	ターケージャロ	カーテージャロ	シーリージャロ	ヤーシージャロ	ホシージャロ
	MMHLLL	MMMMMM	MMHLLL	MMHLLL	LHLLL
ナル形	ターコナッタ	カートナッタ	シールナッタ	ヤースナッタ	ホシュナッタ
	HHHHLL	MMMMMM	HHHHLL	HHHHLL	MHHLL
否定形	ターコネー	カートネー	シールネー	ヤースネー	ホシュネー
	HLLML	MMMHL	HLLML	HLLML	HLML
条件形	タコケリャ	カトケリャ	シルケリャ	ヤスケリャ	ホシュケリャ
	HLLL	MMMM	HLLL	HLLL	HLLL
カッタ形	タカカッタ	カタカッタ	シロカッタ	ヤスカッタ	ホシカッタ
	HLLLL	LHHLL	HLLLL	HLLLL	HLLLL
推量形 2	タカカロー	カタカロー	シロカロー	ヤスカロー	ホシカロー
	MHHHL	MMMMM	MHHHL	MHHHL	MHHHL

a 語幹，o 語幹，u 語幹は，それぞれ基本形語尾は ai＞e:，oi＞i:，ui＞i: のように融合し，また，ウ音便はそれぞれ au＞o:＞o，ou＞u:＞u，uu＞u:＞u の変化を遂げたものと推定される。ウ音便については，この地域の開合にしたがっている。これらの母音融合のあり方は，松田・日高(1996)で分類される大分県の西部方言の特徴である。si 語幹「欲しい」のナル形等に現れる形は，近畿方言等でも見られるホシューナッタの短い形ホシュ-である。この方言の語基末音の現れ方をまとめると表 13 のようになる。

表 13 大分県安心院町方言の形容詞語基末音

<table>
<tr><th>語基の種類＼標準語語幹</th><th>a 語幹</th><th>o 語幹</th><th>u 語幹</th><th>si 語幹</th></tr>
<tr><td>独立語基（基本形，推量形 1）</td><td>e:</td><td>i:</td><td>i:</td><td>ʃi:</td></tr>
<tr><td>拘束語基 A（ナル形，否定形）・（条件形）</td><td>o</td><td>u</td><td rowspan="2">u</td><td>ʃu</td></tr>
<tr><td>拘束語基 B（カッタ形，推量形 2）</td><td>a</td><td>o</td><td>ʃi</td></tr>
</table>

表 13 にはあげていないが，条件形ケリャには，拘束語基 A に現れるほかに，タカケリャ，カタケリャ，シロケリャのように拘束語基 B に接続する語形もある。推量形 2 カローには，拘束語基 B 以外にターケカロー，カーテカロー，シーリカローなど独立語基の語基末短母音形につくものも存在する。ただしこの話者は表 13 の拘束語基 B の語形の方が主に用いるという。

さて，この方言の語幹の長い形容詞は，独立語基およびナル形，否定形に用いる拘束語基Aに現れている。拘束語基Aはウ音便に由来するものである。条件形は同じ語基末母音をとりながら，第1母音は短い形が現れる。この条件形はウ音便から直接導き出せる語形でなく，類推で新たに生じた可能性がある。これとは逆に，同じ類推でも，推量形1，～ジャロの類推によって独立語基を獲得したと推定されるターケカロー，カーテカローは，語幹に長母音が現れている。

この方言の語幹の長い形容詞が出現する語は，新潟県関川村や石川県白峰ほど多くはない。ただ，大分県では国東半島西北側がこの現象の中心地で，安心院町はここから少しはずれた地域である。中心地域では多くの活用形で長母音が現れる（西田 1995)。

筆者の調査でも，この中心地域に位置する西国東郡香々地町香々地[現豊後高田市]（話者 1919 生，男）では，「高い」がターケー，ターケジャロ，ターケカッタ，ターコネー，ターコナルと現れる。語幹の長母音が現れないのは推量形タケカロ（タコカロ）だけである。また，安心院町では長母音が現れなかった「欲しい」も，香々地ではホーシー，ホーシジャロ，ホシカッタ，ホーシュネー，ホーシナル（ホーシュナルは否定された)，ホシカロとほとんどの活用形で現れる。

また，東国東郡姫島村西浦（話者 1926 年，女）は，香々地とよく似た状態である。推量形ターカカロー（ターケカロー）が長母音で現れる。カッタ形ではタカカッタ，ナガカッタ，サブカッタが長母音で現れないものの，他の形では長母音が広く現れる。「高い」ではターケー，ターコナル，ターコネー，ターコケリャ，「白い」ではシーレー，シーレカッタ，シーロナル，シーロネー，シーロケリャ，シーロカロー（シーレカロー)，「欲しい」ではホーシー，ホ(ー)シカッタ，ホーシナッタ，ホーシ(ュ)ネー，ホ(ー)シケリャ，ホ(ー)シカローと現れる。

国東半島の北の付け根にある豊後高田市払田（はらいだ）（話者 1918 生，男）では，安心院町よりさらに活用の出現範囲が狭い。先の独立語基と拘束語基Aにつく否定形（ターコネー）では出現するが，ナル形（タコナル，タカナル）では現れない。拘束語基Bでも現れない。

3.4 島根県西ノ島町方言

島根県隠岐郡西ノ島町赤之江（にしのしまちょうしゃくのえ）の形容詞について述べる。話者は 1928 年生まれの男性である。表 14 で形容詞体系を示す。表左側に語幹の長い形容詞を配置した。a語幹，o語幹，u語幹の例をそれぞれあげる[15]。表中 3a-x高い，3a-y固いの「x，y」はアクセントの区分を示す。アクセントについては不確定の部分を含むが，おおよそ廣戸惇・大原孝道(1953:188-189)の浦郷・海士のタイプに似ているとみた。すなわち，アクセント体系全体では「3型アクセント」，形容詞は2種の型をもち，母音の広狭がアクセントに影響するタイプである。ヤスカッタ，ヤスケリャ，ヤスカラーは第2拍が狭母音，第3拍が広母音で，上昇の遅れが見られる。

表 14 島根県西ノ島方言の形容詞体系

	3a-x 高い	3o-x 細い	3u-x 安い	3a-y 固い	3o-x 白い
基本形	ターケ	ホーセ	ヤーシ	カテー	シレー
	HLL	HLL	HLL	LHL	HLL
推量形 1	ターケダラー	ホーセダラー	ヤーシダラー	カテーダラー	シレーダラー
	HLLMLL	HLLMLL	HLLMLL	LHLMLL	HLLMLL
ナル形	タカーナッタ	ホソーナッタ	ヤスーナッタ	カターナッタ	シローナッタ
	LHHLLL	LHHLLL	LHHLLL	LHLLLL	LHHLLL
カッタ形	タカカッタ	ホソカッタ	ヤスカッタ	カタカッタ	シロカッタ
	LHHLL	LHHLL	LLHLL	LHHLL	LHHLL
条件形	タカケリャ	ホソケリャ	ヤスケリャ	カタケリャ	シロケリャ
	LHHL	LHHL	LLHL	LHHL	LHHL
推量形 2	タカカラー	ホソカラー	ヤスカラー	カタカラー	シロカラー
	LHHLL	LHHLL	LLHLL	LHHLL	LHHLL

語基の種類について述べる。基本形の他，推量形 1 のダラー《だろう》が接続するものは，「独立語基」と呼べるものである。この方言の語基末母音は，標準語のa語幹，o語幹では e，u語幹では i の長短母音のいずれかをとる。一方，ナル形，カッタ形，条件形，推量形 2 に用いられるものは，「拘束語基」と呼べるものである。語基末母音は，標準語語幹の種類に対応して，a, o, uの長短母音のいずれかをとる。ナル形に用いる語基は語基末の母音が長く，ここでは「拘束語基A」としておく。他の拘束語基は「拘束語基B」としておく。これらをまとめると表 15 のようになる。なお否定形は「独立語基」が使われる。ターケコタァネー《高くない》，ヤーシコタァネー《安くない》，ホーセコタァネー《細くない》，カテーコタァネー《固くない》，シレーコタァネー《白くない》などコタァネーが語尾[16]である。

なお，アクセントの対立が現れるのは，独立語基と拘束語基 A のみで，拘束語基 B についてはその対立を失っている。

表 15 島根県西ノ島町方言の形容詞語基末母音

語基の種類＼標準語語幹	a 語幹	o 語幹	u 語幹
独立語基（基本形，推量形 1，否定形）	e , e:		i , i:
拘束語基 A（ナル形）	a:	o:	u:
拘束語基 B（カッタ形，条件形，推量形 2）	a	o	u

さて，語幹の長い形容詞の形は，「高い，細い，安い」の「独立語基」に現れる。この場合，語基末の母音は短く現れる。語幹の母音が長くならない「固い，白い」では，語基末母音は長母音で現れる。ナル形については，これまで見た方言では，語幹の第 1 母

音に長母音が現れたが，この方言では語基末に長母音が現れ，第1母音は長母音にならない。

この方言では，第1音節の長母音が限られた活用形にしか現れないだけでなく，現れる語そのものも少数である。先にあげた「高い，細い，安い」の他，サービ《寒い》，コーメ《小さい》が見つかっているだけである。無論，標準語4拍以上の語には現れない。促音，撥音の形もない。

島根県隠岐島前方言のうち，西ノ島町美田（話者1940年生，男）や中ノ島の海士町（話者1921年）も同様の状態で，少数の語の「基本形」で現れる。知夫里島の知夫村郡（話者1946年生男）では，この種の長母音は全く現れない。「高い」を例にとると次のようになる。タケー，タケーダラー，タカーナル，タカカッタ，タカケリャ，タカカラー[17]である。

3.5 和歌山県田辺市大塔・龍神方言

この小節では，和歌山県田辺市[18]龍神村宮代［旧日高郡龍神村宮代］方言，同県同市熊野［旧西牟婁郡大塔村熊野］方言について述べる。和歌山県に語幹の長い形容詞が存在することは，先に引用した『和歌山縣方言』（表6）等ですでに示した。それによると和歌山県方言の現れ方は第2拍目の子音の性質に関係し，長母音のほかに促音，発音が現れるタイプである。ただ，実際に調査してみると，旧日高郡龍神村と旧西牟婁郡大塔村では様子は異なる点がある。二つの方言を対比して述べる。

3.5.1 旧龍神村方言

旧龍神村宮代［現田辺市龍神村宮代］は龍神温泉から日高川沿いに約8km下った集落である。話者は1928年，1932年生まれの男性2名である。表16に形容詞体系の一部を示す。表16の1行目のH2，H1はアクセント記号で，それぞれ「基本形」が高起式第2核，第1核を表す。表16から明らかなように語幹の長い形容詞は「基本形」のみに現れる。また，長母音の形は短母音の形と常に併用である。なお，「基本形」の語尾は融合母音が現れない。

先の『和歌山縣方言』の報告とは異なり，促音形，撥音形が一般に見られない。長母音が確認できた語は，アーオイ《青い》，カールイ《軽い》，シーロイ《白い》，ナーガイ《長い》，ヒークイ《低い》，フールイ《古い》，ホーソイ《細い》，マールイ《丸い》，ヤースイ《安い》で，「甘い，薄い，固い，からい，臭い，暗い，黒い，寒い，高い，早い，広い，弱い，欲しい」については長母音の形では言わないという。ただし，「細い，安い」の2語についてはホッソイ，ヤッスイと促音でも言うことがあるという。

表 16 旧龍神村の形容詞体系

	3u-H2 軽い	3u-H1 古い	3u-H1 安い	3a-H1 長い
基本形	カルイ カールイ	フルイ フールイ	ヤスイ ヤースイ	ナガイ ナーガイ
	HHL LLHL	HLL LLHL	HLL LLHL	HLL LLHL
ナル形	カルーナル	フルーナル	ヤスーナル	ナゴーナル
	HHHHH	LLMHH	LLMHH	LLMHH
テ形	カルーテ	フルーテ	ヤスーテ	ナゴーテ
	HLLL	LHLL	LHLL	LHLL
否定形	カルーナイ	フルーナイ	ヤスーナイ	ナゴーナイ
	LHLLM	LHLLM	LHLLM	LHLLM
条件形	カルケリャ	フルケリャ	ヤスケリャ	ナガケリャ
	HHLL	LHLL	LHLL	LHLL
カッタ形	カルカッタ	フルカッタ	ヤスカッタ	ナガカッタ
	HHLLL	LHLLL	LHLLL	LHLLL
推量形	カルカロー	フルカロー	ヤスカロー	ナガカロー
	HHLLL	LHLLL	LHLLL	LHLLL

旧龍神村方言は，動詞二段活用の残存など古い形を残す方言としてよく知られている。アクセントの面でも「軽い」HHL と「古い」HLL の区別が見られるが，これは語幹の母音が短い場合の対立で，語幹の長い形容詞については，その区別をなくしている点が注目される。

3.5.2 旧大塔村方言

旧大塔村熊野（ゆや）［現田辺市熊野］は，紀伊半島内部の大塔山(1122m)の約 10km西方にある。話者は 1927 年生まれの男性である。表 17 に形容詞体系の一部を示す。

表 17 旧大塔村の形容詞体系

	3u-H2 軽い		3u-H1 安い			3a-H1 長い		
基本形	カルイ	カールイ	ヤスイ	ヤースイ	ヤッスイ	ナガイ	ナーガイ	ナンガイ
	HHL	LLHL	HLL	LLHL		HLL	LLHL	
ナル形	カルーナル	カール=	ヤスーナル	ヤース=	ヤッス=	ナゴーナル	ナーゴ=	ナンゴ=
	LHLHH	LLHHH	LHLMM	LLHHH		LHLMM	LLHHH	
否定形	カルーナイ	カール=	ヤスーナイ	ヤース=	ヤッス=	ナゴーナイ	ナーゴ=	ナンゴ=
	LHLLM	LLHLM	LHLLM	LLHLM		LHLLM	LLHLM	
条件形	カルケリャ		ヤスケリャ			ナガケリャ		
	HHLL		LHLL			LHLL		
カッタ形	カルカッタ		ヤスカッタ			ナガカッタ		
	HHLLL		LHLLL			LHLLL		
推量形	カルカロー		ヤスカロー			ナガカロー		
	HHLLL		LHLLL			LHLLL		

表 17 で「カール=」等と書かれているのは，後続の～ナル，～ナイを省略した表記である。また，ナル形にはカルナル，ヤスナル，ナゴナルなどの短母音の形もある。

旧大塔村熊野では長母音の形の他に，促音・撥音の形が現れる。それらは「基本形」の他に「ナル形，否定形」の活用形に現れる。「ナル形，否定形」は，先にあげた「拘束語基 A」に相当するものを含む活用形である。表 17 に示したとおり，長母音，促音，撥音の形は短母音の形と常に併用される。

この方言の長母音，促音，撥音の現れ方は，語幹の音韻の性質に依っている。すなわち，促音は 3 拍形容詞の第 2 拍目の子音が破裂・摩擦などの阻害音（/ k, t, s /など）のとき，撥音は第 2 拍目の子音が鼻音（/ m, ŋ /）のときに現れる。一方，長母音は全ての環境で現れ得る。したがって，第 2 拍目の子音が流音（/ r /）と母音だけからなる拍の場合は，長母音の形のみが現れ得る。

以下，確認した促音・撥音・長母音をもつ形容詞は次のとおりである。「促音」，「撥音」の各行に引かれた下線は長母音（カータイなど）でも現れることを示す。

「促音(カッタイなど)」: <u>固い</u>, 臭い, 赤い, <u>安い</u>, <u>低い</u>, <u>薄い</u>, <u>細い</u>

「撥音(ナンガイなど)」: <u>長い</u>, <u>甘い</u>*

「長母音(クーライなど)」: 暗い, 軽い, 古い, 白い, 黒い, 青い, 広い

(＊ 長母音の形は聞くが自分では使わないという)

なお，「高い，辛い，早い，弱い，寒い，丸い，ほしい」は短母音形のみで，促音・撥音・長母音の形では発音しないという。ただし，この話者にとっては，すべての語について短母音の 3 拍の形が普通で，促音・撥音・長母音の語形の現れ方については，時折判断が揺れることがあった。表 17 では存在の確実な語形をあげたが，個々の語例については，時を改めて調査をすれば違った結果が得られる可能性はある。

旧龍神村と比べると，比較的多くの語形に長母音が現れている。また，旧龍神村の場合は，主として長母音のみが現れたが，旧大塔村では促音・撥音も現れることが大きな違いである。これは，先に上げた高知県方言(服部 1933, 土居 1958)と似ているが，旧大塔村方言では，促音・撥音の形には長母音形が併用形として伴うことが多いのに対し，高知県方言では，併用形としての長母音形は見られず，長母音形・促音形・撥音形の分布は相補的で重なり合うことはない。

この方言でも，カルイ HHL とヤスイ HLL のアクセントは区別される。しかしながら，長母音形，促音形，撥音形ではこの区別を失い，すべてヤースイ・ヤッスイ等では LLHL で現れる。この点も高知県方言と共通である。

3.6 主要方言の記述のまとめ

この節では各方言の形容詞体系を，母音融合から生じた語基末音の現れ方，また，ど

のような語基に問題の長母音が現れるかに注目して述べてきた。その際の語基の分類は，独立してそれのみで用いられる「独立語基」，独立しては用いられない「拘束語基」に分け，そのうち特にウ音便による母音融合がおきた語基末音をもつものを「拘束語基 A」，その他を「拘束語基 B」とした。この分類は，語幹の長母音との関連を明示できる利点をもっている。例えば大分県安心院町方言の「高い」の「推量形」がターケージャロ，ターケカロー，タカカローと 3 種現れた場合，これらを一つの活用の併用形として見るよりも，独立語基（ターケー，ターケ）と拘束語基（タカ）とに分類する方が長母音の出現する実情と合致する。

これまで取り上げた新潟県関川村，石川県白峰，大分県安心院町，島根県隠岐西ノ島，和歌山県旧龍神村，旧大塔村の諸方言における長母音の現れ方をまとめると表 18 のようになる。和歌山県龍神・大塔方言はそれ以外の方言と別扱いにした。他の諸方言では，基本形に相当する独立語基に融合母音を含んでいるのに対し，和歌山県方言では基本形に融合母音を含まないためである。

表 18 各方言における語基の種類による長母音の現れ方

	独立語基（融合あり）	拘束語基 A（ウ音便）	拘束語基 B（融合なし）
新潟県関川村	＋	＋*	
石川県白峰	＋**	＋	＋
大分県安心院	＋	＋	－
島根県西ノ島	＋（少）	－	－
	基本形（融合なし）	拘束語基 A（ウ音便）	拘束語基 B（融合なし）
和歌山県龍神	＋（少）	－	－
和歌山県大塔	＋（やや少）	＋（やや少）	－

*　カッタ形のとき少ない。　　**　oi 形容詞を除く。

この語基の関係から見ると，独立語基や基本形については多くの方言で現れ，拘束語基 A（ウ音便による融合），拘束語基 B（融合なし）の順で出現が制限されていることがわかる。すなわち，つぎのような包含関係が見られる。

表 19 語基の種類による長母音の出現傾向

独立語基	＞	拘束語基 A	＞	拘束語基 B
基本形	＞	拘束語基 A	＞	拘束語基 B

この包含関係は次のことを意味する。拘束語基 B で長母音が出現する方言では，必ず独立語基，拘束語基 A でも出現する（新潟県関川村，石川県白峰，その他に大分県香々地・姫島）。拘束語基 A で長母音が出現する方言では独立語基で必ず出現するが，拘束語

基Bでは出現するとは限らない（大分県安心院町の他に豊後高田市払田）。独立語基で出現しても拘束語基A・Bで出現するとは限らない（島根県西ノ島町）。和歌山県方言では，拘束語基Bで出現は見られないが，類似の関係が見られる。

ここに示したこれらの包含関係は，語基末の母音融合という現象，および語基の独立性が，語幹の長母音の存在と密接な通時的関係があることを窺わせる。このことは次節で述べる。

4. 語幹の長母音に関する通時的な考察

これまで見た語幹の長母音はどのように生じたのか通時的な考察を行う。LAJ, GAJ,『現代日本語方言大辞典』や個々の方言の記述研究，あるいは関川村方言，白峰方言のなど，筆者自身の記述資料から，その発生について想定し得る仮説を提示し，それぞれを検討する。仮説は大きく二つに分けることができる。「長音化の仮説」と「長母音保持の仮説」である。

この二つの仮説を検討する前に，第1音節に現れた長母音，促音，撥音の通時的な関係を先に検討しておこう。結論から言えば，これらの促音，撥音は，それらが現れる方言で，長母音から生じたと考えられる。促音，撥音が長母音に還元できるとすれば，これらが現れる方言と長母音だけしか現れない方言との比較が可能になる。また，これら全てが長母音をもつ方言として，先にあげた「長音化の仮説」と「長母音保持の仮説」の検討に組み入れることができる。

4.1 長母音と促音・撥音

この小節では，和歌山県の旧龍神村，旧大塔村熊野を対照させて，長母音をもつ語形と，促音・撥音をもつ語形との歴史的な関係を考える。表20において，両方言の第2音節の子音と第1音節に現れる長母音・促音・撥音の関係を示す。

表20 和歌山県方言における形容詞の現れ方

<table>
<tr><th></th><th>旧龍神村宮代</th><th colspan="2">旧大塔村熊野</th></tr>
<tr><td>阻害音</td><td rowspan="3">（一部促音：ホッソイ，ヤッスイ）
長母音</td><td rowspan="3">長母音</td><td>促音</td></tr>
<tr><td>鼻音</td><td>撥音</td></tr>
<tr><td>流音他</td><td></td></tr>
</table>

歴史的に問題となるのは，次のような相対年代である。二つの可能性を考える。

①【すべての環境で長母音】　＞　【環境により促音・撥音・長母音に分化】
②【環境により促音・撥音・長母音に分化】　＞　【すべての環境で長母音】

もし①であれば旧龍神村の姿が古く，旧龍神村に見られる一部の促音や旧大塔村の促音・撥音は新しい形である。②であれば旧大塔村の姿が古く，そこに見られる促音・撥音は古い形のなごりであり，旧龍神村ではほとんどの形が新しいことになる。

筆者は①を支持する。一般的にいって，共時的に相補分布をなす場合は，歴史的には音韻環境に応じて条件変化したケースがほとんどである。また，ここで見られる環境による分化のあり方（阻害音では促音，鼻音では撥音）も音声的に見て自然なものである。旧龍神村のような音韻条件に関わりなく現れる姿を古いとした方がよいであろう。さらに，先に新潟県関川村方言で確かめられた，ta:gɛ ＞taQgɛ《高い》，ja:sɛ ＞jaQsɛ《安い》の変化はこれを支持する根拠となる。また，旧龍神村は紀伊地方では奥地にあり，地理的にみても古い形が残る傾向はあり得る。

旧龍神村において長母音形の語数がきわめて少ないのは，環境に応じた分化が進む前に[19]，その形そのものが消失しかけていると見る。旧大塔村では相対的に古い長母音形と新しい促音形・撥音形が共存しているが，現在ではそれら全体が消失の傾向にある。

先の表 6 で示された和歌山県内に見られる形容詞の促音・撥音は，おそらくここで推定したように，もとは長母音をもつ形だったと言えるのでないかと思われる。

音韻の条件が関係する高知市方言についても，音韻条件が関係しない長母音の状態から，条件にしたがって，長母音，促音，撥音に分かれた可能性がある。同じ四国の愛媛県周桑郡には，アーカィ，ターカィ，ヒークイのように長母音をもつ語形が見られた。それと高知市方言を歴史的に結びつけて考え得るかもしれない。あるいは，もっと広く，和歌山県と四国の高知県・愛媛県を結ぶ一つのエリアを，同じ変化傾向を共有するものとしてまとめることができるかもしれない。

山形県で多く見られたタッゲァなどの促音形についても，新潟県関川村の変化の事例から，長母音形ターゲァ等から生じた可能性はあるが，今の段階ではこの地域の見解の表明を保留する。標準語にない促音をもつ形容詞は，新潟・山形県以外に，宮城県，岩手県にも広く分布し，これらの音韻条件，各活用形の語形，アクセント，地理的分布等をいろいろ勘案しなければならず，それらの情報が十分に整理されていないためである。この地域の考察に関しては，別の機会に譲る。

4.2 長音化の仮説

この節では長母音と短母音の歴史的関係について述べる。まず，想定し得る二つの仮説のうち，「長音化の仮説」について述べる。「長音化の仮説」は方言に見られる語幹の長母音は，短かった語幹母音が何らかの要因で長くなったという仮説である。いくつかの要因が考え得る。これらの要因は，それぞれの地域，あるいはもう少し大きな地理的エリア（例えば和歌山・高知・愛媛を結ぶエリア）ごとに個別に当てはめることができる。だがここでは，まず一般的な要因を考え，それらの要因がこれまで述べた個々の具

体的事例に照らし合わせて，説明の妥当性をもつか検討する。

4.2.1 強調

単語の一部の音節が強調によって長音化したという説を検討する。検討の前に，長母音，促音などの長音節を含む「強調」について，二つのレベルを分けておく必要がある。

4.2.1.1 二つの強調

一つは「パラ言語的な強調」で，アマーイ「甘い」，ヒッドイ「ひどい」，というような臨時的な長音節を伴うものである。この「強調形」は「通常形（非強調形）」を“変形”させたもので，強調の程度に応じて長音節の実現の長さに変動を加えることができる（アマーーイ，ヒッッドイなど）。また，長母音，促音などを掛け合わせた実現も可能である（アッマーーイ，ヒッッドーイなど）。これらには「ささやき(whisper)」，「息もれ音(breathy voice)」，「りきみ」[20]などの二次的な発声を伴うことが多い。これらの発声や超分節的(suprasegmental)な要素を複合的に組み合わせることで，程度の強弱だけでなく，話し手の事態に対する様々な価値判断を込めることができる。

もう一つは，いわば「言語的な強調」で，臨時に作られた形ではなく，話し手の頭の中のレキシコンに入っている「語」である。この「強調形」は「通常形（非強調形）」の存在が前提となっている。対比される対の語が共時的に存在することで，長音節の語形が「強調」の意を帯びる。先に触れた服部(1933)であげられた例，「やっぱり，あんまり，おんなじ，まんま（儘）」には「やはり，あまり，おなじ，まま」が併存する。「強調」といっても実際には通常形との強さの差はほとんどない場合もあり，むしろ「強調的」というより「口語的」という場合が多い。通時的には長音節を含む語形が後から生じて，定着したものがほとんどであろう。

4.2.1.2 諸方言の形式と「強調」

これまで取り上げた諸方言の形式は，先にあげた「パラ言語的な強調」ではないことは明白であろう。調査で現れた実現形には，音節長が自由に操作できる性質はなく，二次的な発声も伴っていない。

和歌山県方言，高知県方言で，先行研究（與田 1933，村内 1982；服部 1933，土居 1958）が「強調」，「意味が強い」と呼んでいるものは，「言語的な強調」を表す。共存する「通常形」との対比でそのように解釈しているのであろう。土居(1958)のいう「大体固定的習慣的」(p.68)，「三音節形容詞が長音化するのは，大体ラング的」(p.73)（以上傍点新田）という言葉は，これらが「語形」であることの現れと考えられる。

先に述べたように，これらの「強調形」では，「通常形」にあるアクセントの対立を失い，低起式アクセントに一本化している。「強調」，「意味が強い」という特別なコノテー

ションを帯びるのは音節長だけでなく，アクセントの作用もあると考える。

筆者自身の調査では，和歌山県の両方言の話者は，最初は第 1 母音が長い形の存在をすぐさま意識できなかった。誘導により反芻しているうちに内省できるようになり，いくつか拾えるようになった。両方言とも長母音の形が「強調」であるという意識は希薄であった。長母音形が消失の途上にある故であろうか，食い違いを見せる。

本稿の記述の前半であげた新潟県関川村，石川県白峰，大分県安心院町，島根県西ノ島の各方言は，「強調形」かどうかの問題についても和歌山県方言と様相が異なる。

新潟県関川村では，最初話者は自分が発音する形容詞の第 1 母音が長いという意識は全くなかったが，実現形は常に長く発音される。それを指摘すると，話者自身で内省してみて確かに長いと確信するという有様だった。長母音形は「通常形」との対比で現れているのはない。

石川県白峰では，例えば「固い」には ka:tja のみが存在し，katja は存在せず，また，標準語形 katai は本来形ではなく，“外来語”のようなものである。この方言では，原則，長母音形が唯一の語形である。

大分県の諸方言では，これらの第 1 母音は最初から長いと意識できる様子であった。併用形として，短母音の形もあるが，これらは対になって程度の差を示す「強調・非強調」の関係をなすのではなく，むしろ，長母音形の方が「地元らしいことば」というスタイルの違いのように思われた。

島根県西ノ島方言は，関川村方言と同様で，意識はしていないが実際の母音の発音が長いというものだった。ただ，すでに 3.4 で述べたように，安定して長母音で現れる語数は少なく，それらの長母音形が「強調」という意識はないと思われる。

新潟県関川村，石川県白峰，大分県諸方言，島根県西ノ島の各方言は，共時的には「強調」というニュアンスを含まない通常の「語形」であると言ってよい。

4.2.1.3 強調からの発生説

形容詞の長母音は強調から発生したという説は，形容詞が程度の差のある様々な様態を表し，強調の形を取りやすいという我々の感覚と馴染むため，受け容れやすい説のように思われる。現に形容詞の強調に関してパラ言語的な様式も含めた研究もあり，具体的な形式や出現の制限など興味深い問題ではある（松本恵美子 1998)。

しかし，本稿で取り上げた和歌山県方言以外の長母音に関しては，強調形由来説には問題がある。以下にその 3 点をあげる。

(a) これまで見てきた諸方言では，長母音の語形に強調の意味が見られない。

(b) 語形としての「強調形」には，対になる「通常形」の存在が前提となるが，その条件に当てはまらない場合がある。

(c) 変化の過程で短母音の「通常形」と長母音の「強調形」が併用されていた時期を想定し得るが，この後なぜ「強調形」が「通常形」の座を占めるようになり，本来の「通常形」が消失したのか説明が困難である。

上記(a)，(b)については，共時的な事項であり，強調の意味や対の通常形が存在しなくても，強調形由来を主張できるかもしれないが，(c)の説明は困難であると思われる。例えば，関川村で kate: という「通常形」が使用されている中で，新たに ka:teの「強調形」が発生し，本来の kate: を捨ててしまうプロセスは考えにくい。「強調形」の前提となっている「通常形」を失うことは，「強調形」そのものの存在意義を失うからである。

和歌山県方言，および高知県方言の長母音に関しては，(a)に問題は残すものの，(b)には抵触せず，強調形由来の蓋然性はあるかと思う。また，表 19 で示したように，独立性のある「基本形」で最も長母音が現れるのは，この形に「強調形」が現れやすいことと関係がある可能性がある。

4.2.2 融合で生じた長母音の影響

形容詞語尾の融合やウ音便によって生じた長母音が影響して，形容詞の第 1 母音が長くなったという説を検討する。

先の 3.6 節では，長母音が現れる語形に関して，次のような包含関係があることを示した。

表 19（再掲） 語基の種類による長母音の出現傾向

独立語基	>	拘束語基 A	>	拘束語基 B
基本形	>	拘束語基 A	>	拘束語基 B

これらは語幹の長母音と融合母音との密接な関係を窺わせるものである。

例えば白峰方言では語幹の長母音が現れるのは，ka:tja《固い》のような語尾が-Cja(<-Cai)の場合，ka:ri《軽い》のような語尾が-Ci(<-Cui)のような場合である。一方，語尾がkuroi《黒い》のように-Coi のときは母音融合が起こらず，それに連動して語幹の長母音も現れない。また，図 4，5 で見られるように，『新潟県言語地図』の「高くなる」，「安くなる」のウ音便が現れる地域と語幹の長い形容詞が現れる地域とがほぼ一致している。さらに GAJ における各方言の長母音の現れ方をみると，音便が現れ得るナル形やテ形で出現が目立つ。

これらのことから，語幹の長母音の発生には，語尾の母音融合やウ音便による隣接する長母音の発生による影響が想定し得る。ウ音便のケースは次のような過程が考え得る。「高い」の連用形を例に取る。

表 21 隣接する融合母音による影響

CVCVV ＞ CVCV: ＞ CV:CV: ＞ CV:CV
(takau- ＞ tako:- ＞ ta:ko:- ＞ ta:ko-など)

語幹の第 1 母音が後ろの第 2 母音に同化する変化を考え，二つの長母音が存在する中間段階(CV:CV:)を想定した。GAJ や『新潟県言語地図』にも，この語形（ターケァー，ヤーシーなど）がいくつか見られる。その後，第 2 母音が，異化などの要因で短音化したという過程である。

しかしながら，この変化の説明にも次の問題点がある。

(a) CVCV: ＞ CV:CV:の同化に説明的妥当性があるかどうか疑問である。

(b) 語幹末融合母音が見られないときの長母音形の存在が説明できない。

まず，(a)について。もしこの音変化が広く起こったとすると，動詞のウ音便が現れる，「歌う」，「思う」などのタ形にも 'u:to(:)ta，'o:mo(:)taなどが現れるはずだが，全く見られない。また，4 拍形容詞の「重たい」のナル形「重たくなる」でも 'obo:to(:)-の語形が現れるはずだが，記述で取り上げた方言でそれは見られなかった。ここで仮定した変化は一般的に起こり得る変化とはいえない。

ただし，2.2.1 で取り上げた吉田(1931)の新潟市方言には，アターラシュ，ヒサーシュ，セワーシュが，また，2.1.3 で取り上げた『現代日本語方言大辞典』でアカール（アカーリ），ミージケァナル，ミージケァバが報告されている。ヒサーシュ，セワーシュ，アカール（アカーリ）は隣接する融合母音の影響で説明できるが，アターラシュ，ミージケァナル，ミージケァバは説明できない（アタラーシュ，ミジーケァ…ならば説明可能）。これらは 3 拍形容詞の長母音の影響によって変則的に生じたものであろう。

次に(b)について。表 2 ではカッタ形 ta:kakatta が新潟県巻町，柏崎市，長岡市，白峰で見られる。「拘束語基 B」を用いるそれ以外の活用形でも長母音の形は存在する。また，長野県栄村屋敷（秋山郷）方言はウ音便の方言ではないのに，ナル形にta:kakonaro，テ形にta:kakode が現れる。ただし，これらの長母音は，基本形の語幹母音が長くなった後で，その類推によって広まったと考える余地は残っている。

4.3 長母音保持の仮説

この仮説は白峰方言，関川村方言はじめ，これまでの資料に見られる各地の形容詞語幹の長母音の形は相対的に古く，短母音の形は新しいとする仮説である。この仮説は形容詞語幹の長母音は古い日本語の姿を保持し，現在のほとんどの方言が本来あった長母音を失ったという帰結につながる。古い言語の状態を限定された資料から推定するのは相当の危険も伴うが，以下，これまで述べてきた事実の中からその根拠を述べる。

4.3.1 長母音保持の根拠

長母音保持の仮説の根拠は次の二つである。

(a) ［短母音］＞［長母音］より，［長母音］＞［短母音］の方が自然な変化である。
(b) 語幹の長い形容詞は周圏的な地理的な分布を示す。

まず(a)について。音変化の一般傾向として，長い母音が短くなることはしばしばあるが，逆に短い母音が長くなることは一般的ではない。先のタコーナル＞タコナル，ウトータ＞ウトタや，語彙的なものではテー＞テ《手》，ホントー＞ホント《本当》など，短音化している例は数多い。

次に(b)について。表 2，表 3 の分布の在り方は言語地理学でいう周圏分布であり，周辺にある長母音をもつ語形は，中心にある短母音の語形よりも古いと解釈するのが定石である。特に石川県白峰，長野県栄村（秋山郷）はかつての秘境であり，独自の方言特徴をそなえ，「言語の島」に数えられる。この一致は興味深い。秋山郷では形容詞の長母音形は最も古い層の特徴であり，それが消滅しつつあることはすでに述べたとおりである。また，LAJ で散発的ながら広く見られた分布域が GAJ ではその範囲が狭くなっていることは長母音の全国的な衰退を意味している。これらは［短母音］＞［長母音］＞［短母音］の回帰的な変化ではなく，［長母音］＞［短母音］の一方向の流れを示していると思われる。

4.3.2 融合母音との関係

長母音保持の仮説と 3.6 節で示した包含関係との関係を検討する。この仮説から見れば，第 2 母音が長母音の由来をもつとき，なぜ第 1 母音の長母音が保持されたか説明が必要である。これについては(c)のように考える。

(c) 語幹末に融合による長母音が生じたことで，もともと存在していた語幹の第 1 音節の長母音が保持された。

「高い」のウ音便のケースは次のような過程が考え得る。

表 22 長母音保持と短音化

CV:CVV ＞ CV:CV: ＞ CV:CV
(ta:kau- ＞ ta:ko:- ＞ ta:ko-など)

第 1 母音は仮説にしたがって最初から長い。そこにウ音便によって二つの長母音が生じた。この段階で長母音が短音化する変化が形容詞だけでなく動詞にも起こった（ta:ko:- ＞ ta:ko-, 'uto:ta ＞ 'uto̲ta《歌う》）。短音化は一つの音節だけに起き，長い音節が連続している場合は，後ろの音節だけが短音化する傾向にあった（［長］［長］＞［長］［短］ta:ke:

> ta:ke, ta:ko:- > ta:ko-）[21]。長母音が二つ連続していることで，語幹の長母音の短音化の変化がブロックされたといえる。

また，白峰方言などのカッタ形他の「拘束語基 B」で，語幹の長母音が短音化しなかったのは，語基を 3 拍に保とうとする構造保持の力が働いたことが背後にあると考えられる。例えば，白峰方言で，「固い」のka:tja（独立語基），ka:to-naru（拘束語基 A），ka:ta-katta（拘束語基 B）の語基はすべて 3 拍である。

4.3.3 語幹母音が短母音の方言の場合

その他の方言で，take:，tako:naruのように語幹の母音が短く，融合母音が長く現れる方言については，二つの場合があると推定する。すなわち，一つはかなり早い段階で語幹の長母音は短音化し，その後に融合母音が生じ，それが長母音として現れる場合（ta:kaki > takai > take:，ta:kaku > takau > tako:），もう一つは，第 1 音節の長母音を保ったまま，語幹末母音の融合が起きて，表 22 で述べた［長］［長］の形が生じたが，その後［短］［長］へと変化した場合である（ta:ke: > take:，ta:ko:naru > tako:naru）。この変化には，かなり早い段階で語幹の長母音が短音化した有力方言，すなわち標準語形等の影響が背後にあったと推定される。これらの語形が新潟県内および大分県でも長母音地域内やその周辺部で見られる場合は，後者のプロセスを経て成立した可能性がある。

4.4 広範なエリアの長音化とその保持

二つの仮説以外の第 3 の説について考える。この説は，現在語幹の長い形容詞が現れている地域を結ぶ広範なエリアで，ある時期長音化が起こり，その後それらを分断するように長母音が失われたとするものである。先にあげた「長音化の仮説」と「長母音保持の仮説」を折衷した仮説である[22]。その広範なエリアとは，例えば，新潟県北部，長野県北部，石川県，島根県，九州北東部を広く覆う日本列島の日本海側半分のようなものを想定し得る。

しかし，この折衷案はつまるところ「長音化の仮説」の一種で，長音化が適用される範囲が広範であるだけである。結局，その長音化がどういう原因で起こったのかの説明が求められる。

4.5 通時的考察のまとめ

語幹の長母音に関する歴史的な解釈には，多くの問題を残すが，この小節では筆者が考える仮説をまとめる。

① 新潟県諸方言，石川県白峰方言，長野県秋山郷方言，島根県西ノ島町方言，大分県国東宇佐方言に関して次のような推定をする。すなわち，これらの方言で現れる形容詞

語幹の長母音は，多くの現代諸方言で現れる短母音より相対的に古いと推定する。多くの方言では，一つの長母音の音節が短音化した変化（[長] > [短] 'uto:ta > 'utota）が生じたが，長い音節が連続している場合は，後ろの音節だけが短音化した（[長] [長] > [長] [短] ta:ke: > ta:ke,　ta:ko:naru > ta:konaru)。その制限のために，母音融合のある語形に多く現れるようになったと推定する。

② 和歌山県田辺市龍神村，旧大塔村に関しては次のような推定をする。すなわち，旧大塔村方言では，形容詞語幹の長母音・促音・撥音は，音韻によって条件づけられて現れるが，歴史的には，龍神村方言のような音韻の条件に関係なく長母音が現れるのがもとの形で，促音・撥音はそこから変化したものと推定する。しかし，そのもとの形の長母音は，①で想定した長母音と同じ性質のものという推定は，今のところできない。これらの方言では，語幹の最初の音節が長く，アクセントが低起式で現れる様式（ター[カ]イ, ヒー[ク]イ CV:[CV]i）が新たに発生した可能性がある。また，同様の様式が，本州西南部でだけでなく，高知県・愛媛県を結ぶさらに広いエリアにまたがっているという想定も可能かもしれない。その形式の由来は「語形」としての「強調形」の可能性が残される。

5. 残された問題点

本稿では，「語幹の長い形容詞」について，これまでどのような記述がなされてきたかを整理し，筆者が行った形容詞体系の記述結果を述べた。この現象が現れる諸方言のなかで，音韻条件と関係する高知県方言については，現地調査ではなく，先人の記述に依った。また，タッゲァ《高い》などの促音が現れる山形県諸方言や岩手・宮城各県の状況などがほぼ手つかずのまま残った。東北地方の促音形については，比較的大きな規模の調査が必要となってくるであろう。これらが明らかになってあとで，新潟県や秋山郷，白峰，隠岐，大分等の長母音との関連性を考えれば，日本語全体の歴史としてより意味をもってくるであろう。この点については別の機会を待ちたい。

和歌山県方言の場合は，「強調」という記述があり，音韻条件が関わっている点，またアクセントの中和がある点で，他の方言と異なる扱いをしたが，これとて，長母音保持の説にねじ込むことができる。

現代語の日本語形容詞に汎用的に用いられる強調様式は，語尾イの前を延ばすものが一般的である（タカーイ，アマーイ，ツメターイなど)。そして，これらは先に述べた「パラ言語的な強調」であると考えられる。パラ言語的な様式であっても，これまでの記述で見たような，語幹の第 1 母音を延ばす様式は一般的ではない（松本恵美子 1998)。現代語の感覚からではあるが，ターカイ等の元になった第 1 音節長母音の強調形式が本当に存在したか，疑義を差し挟むこともできよう。長母音保持の仮説からすれば，長母音

の“強調形”は本来の形であり，短母音の新しい“通常形”を外から導入した段階で，長母音形に「強調」のコノテーションを与え，アクセントも変化させたと言えなくもないのである。

本稿の「語幹の長い形容詞」の長母音に関する通時的な考察では，思い切った仮説の側についたが，残された重要な問題もある。一つには，これらの長母音は，形容詞の各活用形にしか現れず，長母音が盛んに見られる方言であっても，「高さ，長生き，高まる」などの派生した名詞・動詞や「赤，黒」など同一語根の語には，それが現れないことがあげられる。また，何よりも，こうした長母音が方言以外の中央語の文献に出てこないことも問題として残る[23]。元来長母音は，古い時代の文献では表記されない傾向にあるが，それでも中世末以降の事例のなかにさえ，形容詞語幹の長母音を反映させた証拠が見いだせないのは気になる。もし，形容詞語幹の長母音については，文献に望みをかけられないとすれば，方言に現れた現象の綿密な比較研究しか手がかりがないことになる。「語幹の長い形容詞」について，まだ発見されていない，あるいは十分に認識されていない方言データの出現が今後の解明の鍵を握っているかもしれない。

注

1 本稿では考察の範囲を本土方言とする。琉球方言の「高い」の項目は*takasa-ariのkの脱落によって起きたtaasa- 等の長母音の形式が多く現れ，現段階の筆者では，どの形式が本来の長母音か判定が難しいからである。

2 促音の例として，接尾辞-kaをもつタカカから生じたタッカ，takakattaの2拍目の母音が落ちたタッカッタ等はここから除く。

3 井上(2000:236)の「2111 暗くない」の図では，確かにKUUREAGUNEAの語形が庄内各地の若年層に見える。ここから，語幹の3音節化（長音化）を想定しているようだが，鶴岡では逆に最も高年層にKUURAGUNEA（無活用化していない）の語幹の長い形が見られる。後に示すように，鶴岡では語幹に長母音をもつ形は古い層に属していると思われる。

4 秋山郷方言においては長母音の語形がほとんどであるが，「熱(暑)い」はアッツェ]ーのような促音の形である。このような促音形は主に東北から関東にかけて広い分布域を持つ。『現代日本語方言大辞典』で拾うことができる地点は，青森県弘前市，八戸市，岩手県盛岡市，安代町，秋田県秋田市，河辺町，山形県余目町，新潟県新潟市，千葉県袖ヶ浦市，山梨県甲府市，長野県秋山郷，富山県五箇山である。後の3.1で示す新潟県関川村方言の 'aQcɛ《熱(暑)い》と 'a:zɛ《厚い》の対立も参照。

5 ここでの「語幹」末母音は，正確には後の定義でいう「語基」末母音のことであるが，先行研究紹介の段階での定義は煩雑であるし，理解に支障がないものとみて，一般的な「語幹」という用語のままにしておく。

6 標準語との対比から，語尾-kodeを-ko-deと二つに切って-ko-を語幹に付く接辞の一種とも考え得るが，ここでは語幹の種類を見るのが目当てなので，単純に-kodeを一つの語尾と考える。

7 表6のリストのうち，「ヒツクイ」は原著表記「ヒツケイ」とあるが，「ヒッカ（熟柿），ヒツケイ（低い），ビツクラ（びつくり）」の見出し語掲載順から見て，「ヒツクイ」の誤植であろう。

8 [アオ]イ（青い）のアクセントは誤植ではないであろう。中井幸比古『高知市方言アクセント小辞典』でもH2,OKの記録がある。

9 服部（1933:20）ではさらにアッカ[イ]という音調もアクセントの資格を得ようとしていると述べられている。

[10] これらの音素表記は特別なものを含んでいる。長母音後半のモーラ音素を表す記号として「:」，促音のモーラ音素は「Q」，「シ，ショ」はʃi，ʃo（関川）で，「チャ」はtja（白峰）とする。これらの表記法を用いるのは音声の実質がイメージされやすく，形容詞の語幹の形を一貫させることができるためである。
[11] 「M活用群」はMoodに由来し，「P活用群」はPropositionに由来する。命題全体について話し手の判断を付加するとき，独立語基が選択されるのに対し，テンスや極性など命題内容そのものに関係する場合には，拘束語基が選択される。このような2極に活用の形式が単純化しているのは，後に述べる「拘束語基B」が「拘束語基A」に統合されたことによる。
[12] 「へだるい」は「空腹な」の意味。「明るい」以外で，-uiで終わる4拍形容詞がないため俚言形をあげる。
[13] namaŋu:sja《生＋臭い》や，mi:niki《醜い（見＋にくい）》などの複合語はこの限りではない。
[14] ヤーシーのシーの音は[si:]で，[s]は口蓋化が少ない（日高貢一郎氏の指摘により確認）。
[15] si語幹の「欲しい」はこの方言ではあまり用いず，普段は別語のヨーナイを使用する。
[16] いうまでもなく「～ことはない」の由来である。予想されるターカネーなどの形は用いない。GAJも～コタァネーの形を記録する。
[17] タカカラーズンとも。この語形はタカカラ＋ウズに由来すると思われる。ただし語末のンは不詳。
[18] 2005年5月，旧田辺市と合併した旧日高郡龍神村，旧西牟婁郡中辺路町，旧東牟婁郡本宮町は，それぞれ田辺市龍神村～，田辺市中辺路町～のように，字名の前に旧町村名をそのまま残したのに対し，旧西牟婁郡大塔村は田辺市のあとに直接字名が続く。なお，本稿の調査地点の田辺市熊野（ゆや）は旧西牟婁郡大塔村熊野のことであり，有名な田辺市本宮町本宮（旧東牟婁郡本宮町）熊野大社とは別の地点である。
[19] 表20でも示したように，旧龍神村ではホッソイ，ヤッスイの促音形が見られる。これらは促音への分化の初期段階が現れたと見る。表6の『和歌山縣方言』の例を見ると，摩擦音/s/をもつ語形は長母音形をもたず，促音形が地理的に広範囲に分布していることがわかる。おそらく長母音の変質は，摩擦音の促音化から始まった可能性があると思われる。
[20] 定延利之（2005:126f）。また同書p.66fにはイントネーションがアクセントを無効にする例があげられる。なお，その指摘は早くに服部（1933:17f）に見られる。
[21] 助川泰彦・前川喜久雄・上原聡(1999)は，長い二つの音節が連続するとき，後半の長母音が短音化して発音されやすいこと，また，知覚の面でも非語頭の短音化は見逃されやすいことを実証している。
[22] この説は，第78回日本方言研究会（2004年5月21日，於：実践女子大学）で，筆者が骨子を発表したあとに，加藤正信氏（いわき明星大学）から伺った意見である。
[23] この点については，柳田征司(1993)の第3節，「古代語の長音と中世語・近世語の長音」(pp.127-170)を参照した。

引用文献

安藤潔(1997)『越後粟島の方言』，粟島浦村教育委員会

井上史雄(2000)『東北方言の変遷』，秋山書店

井上史雄・篠崎晃一・小林隆・大西拓一郎編(1996)『日本列島方言叢書 11　北陸方言考 1　北陸一般・新潟県』，ゆまに書房

岩井隆盛(1959)「白峰（牛首）方言概要」『白峰村史 下巻』，白峰村史編集委員会編，pp.276-321

岩井隆盛(1962)「白峰方言の分布と変化」『白峰村史 上巻』，白峰村史編集委員会編，pp.425-451

上野善道(1984)「新潟県村上方言のアクセント」『金田一春彦博士古希記念論文集 第二巻言語学編』，pp.390-347

大橋勝男(1998)『新潟県言語地図』，高志書院

加藤正信(1962)「新潟県方言のウ音便類 —非ウ音便との接触を中心として— 」『方言研究年報』5（井上史雄・篠崎晃一・小林隆・大西拓一郎編(1996)，pp.53-66 に再録）

劔持隼一郎(1964)「粟島浦村の言語（一）」『高志路』201（井上史雄・篠崎晃一・小林隆・大西拓一郎編(1996)，pp.35-42 に再録）

国立国語研究所編(1966)『日本言語地図 第 1 巻』，大蔵省印刷局

国立国語研究所編(1993)『方言文法全国地図 第 3 巻』，大蔵省印刷局

定延利之(2005)『ささやく恋人，りきむレポーター —口の中の文化— 』，岩波書店

杉山正世(1930)『愛媛縣周桑郡丹原地方言語集 第二稿本』ガリ刷，東京大学総合図書館蔵

助川泰彦・前川喜久雄・上原聡(1999)「日本語長母音の短音化現象をめぐる諸要因の実験音声学的研究と音声教育への示唆」，アラム佐々木幸子編『言語学と日本語教育』，くろしお出版，pp.81-94

竹内三一郎(1954)「西蒲原郡方言の語法（三）」『高志路』159（井上史雄・篠崎晃一・小林隆・大西拓一郎編(1996)，pp.145-151 に再録）

都竹通年雄，早川宏，渡辺綱也(1974)「越後の諸方言のあらまし」『日本方言研究会第 19 回研究発表会発表原稿集』pp.34-43

土居重俊(1958)『土佐言葉』，高知市立市民図書館

中井幸比古(1997)『高知市方言アクセント小辞典 —方言アクセント小辞典(1)— 』平成 9 年度科学研究費補助金研究成果報告書

中井幸比古(2002)『京都府方言辞典』，和泉書院

西田祐史(1995)「大分県方言における形容詞の長呼化の実態 —県北部・西部を中心に— 」大分大学教育学部卒業論文

新田哲夫(1994)「鶴岡方言のアクセント」，国立国語研究所『鶴岡方言の記述的研究 —第 3 次鶴岡調査 報告 1— 』，秀英出版，pp.81-140

新田哲夫(2002)「石川県白峰方言の形容詞 —語形とアクセント— 」平成 14 年度文部科学省補助金（特定領域研究）研究成果報告書，上野善道編『消滅に瀕した方言アクセントの緊急調査研究 3』，pp.143-171

新田哲夫(2004a)「NHK 全国方言資料（石川県石川郡白峰村白峰）改訂と注釈」『金沢大学文学部

論集 言語・文学篇』24，pp.29-63
新田哲夫(2004b)「方言に見られる形容詞語幹の長音」『日本方言研究会第 78 回研究発表会発表原稿集』，pp.35-46
日本放送協会編(1999)『CD-ROM 版 全国方言資料 全 12 巻』，日本放送出版協会
服部四郎(1933)「アクセント方言」『國語科學講座Ⅶ 第三輯 國語方言學』明治書院，pp.1-74
姫島村史編纂委員会編(1986)『姫島村史』，大分県東国東郡姫島村
平山輝男・大島一郎・大野眞男・久野眞・久野マリ子・杉村孝夫編(1992)『現代日本語方言大辞典 第 1 巻』，明治書院
平山輝男・大島一郎・大野眞男・久野眞・久野マリ子・杉村孝夫編(1993)『現代日本語方言大辞典 第 7 巻索引 I』，明治書院
廣戸惇・大原孝道(1953)『山陰地方のアクセント』，報光社
馬瀬良雄編(1982)『信州の秘境 秋山郷のことばと暮らし』，第一法規
馬瀬良雄編(1992)『長野県史 方言編 全 1 巻』，長野県史刊行会
松田正義・糸井寛一(1993)『方言生活 30 年の変容 上巻』，桜楓社
松田正義・日高貢一郎(1993)『方言生活 30 年の変容 下巻』，桜楓社
松田正義・日高貢一郎(1996)『大分方言 30 年の変容』，明治書院
松本恵美子(1998)「強調表現の位置と効果についての覚え書き：現代日本語の形容詞の場合」『言語学論集』，京都大学総合人間学部基礎科学科情報科学講座，pp.55-68
村内英一(1982)「和歌山県の方言」『講座方言学 7 近畿地方の方言』，国書刊行会，pp.169-193
村内英一(1959)「和歌山県東牟婁郡高池町（新 古座川町）」『日本方言の記述的研究』明治書院，pp.167-187
柳田征司(1993)『室町時代を通して見た日本語音韻史』，武蔵野書院
吉田澄夫(1931)「新潟方言二三」『方言』2，pp.34-41
與田左門(1933)「紀北方言の形容詞」『土の香』9-1 土俗趣味社，pp.1-6
和歌山縣女子師範學校・和歌山縣日方高等女學校(1933)『和歌山縣方言』
渡辺富美雄(1992)「新潟市方言」，平山輝男他編(1992)『現代日本語方言大辞典 第 1 巻』，明治書院，総論編 pp.143-148

付　記

この論文を作成するにあたり，新潟県関川村朴坂，粟島浦村内浦，長野県栄村小赤沢・和山，石川県白山市白峰，和歌山県田辺市旧龍神村宮代・旧大塔村熊野，島根県海士町・西ノ島町美田・赤之江，知夫村郡，大分県安心院町飯田，香々地町香々地，豊後高田市払田，姫島村の話者の方々に，お世話になった。また，新潟県関川村「せきかわ歴史とみちの館」，長野県栄村秋山総合センター「とねんぼ」，田辺市教育委員会龍神支所，島根県海士町教育委員会，海士町中里「ひまわり」，島根県西ノ島町浦郷公民館，大分県姫島村教育委員会の方々の協力を得た。記して御礼申し上げる。

また，大分県調査のさいには，大分大学の日高貢一郎氏にお世話になった。西田祐史氏の卒業論

文の閲覧の機会を与えてくださったのも日高氏である。記して御礼申し上げる。

本研究の骨子は，日本方言研究会第78回研究発表会（2004年5月21日，実践女子大学）で発表したことがある。発表後，白峰の他に，大分，隠岐，和歌山の補充調査を行った。

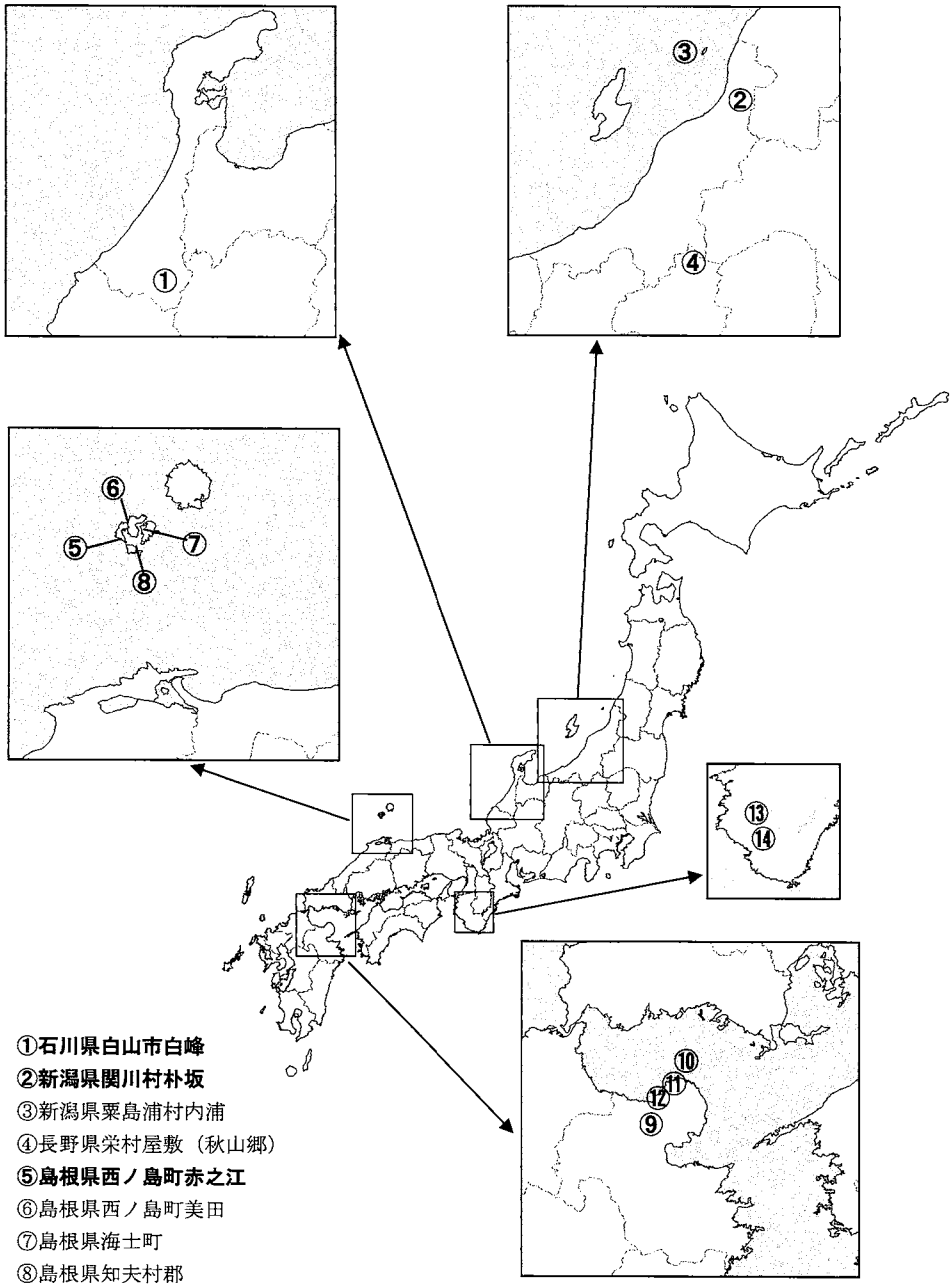
本研究は，平成16, 17年度科学研究費補助金基盤研究(C) 研究課題番号16520275「石川県白峰方言の調査研究と方言語彙のデータベース化」(研究代表者：新田哲夫）の一部を使って行われた。提出した報告書には本稿とほぼ同内容の論文が掲載されているが，本稿はそれを書き改めたものである。

2006年12月記す

追　記

本稿脱稿後，この内容を，東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究プロジェクト「音韻に関する通言語的研究」2006年度第3回研究会（2007年3月3日，東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所大会議室）で発表した。この研究会において，早田輝洋先生，上野善道先生，湯川恭敏先生，松森晶子先生より有益な意見・質問をいただいた。記して感謝申し上げる。特に早田先生から「全ての形容詞の語幹母音が長かったと考えるのかどうか。」という質問に対して，「全ての形容詞の語幹母音が長いと考えているのではない。すなわち短母音のものと長母音のものがあったと考える。ただ，どの語が該当するか選別は難しいが，今回取り上げた語のかなりの部分は長かったと考える，少なくともLAJの資料（本稿表2）の「細い」の項目はその現れから，長いとせざるを得ないと思う。」と答えた。本稿の本文にそのことが十分に反映されていないが，この追記で記すことにし，本文はそのままにしておく。さらに上野先生より「強調による長母音形の発生に関して，強調形から通常形への変化と通常形の消失を否定する筆者の反論は弱い。例えば動詞において，“強調”的だった連体形の終止用法が現在の終止形に至って残る場合もある。こうしたことはあり得ることではないか。」との指摘を受けた。確かに一般的にはそのとおりであるが，筆者が調査した地域の形容詞の長母音に関して，強調形からの変化が妥当であるか，未だに疑念を抱いている。論拠の弱さは認めるが，これも本文をそのままにしておく。最後に，こうした発表の機会を与えていただいた上記プロジェクト研究会chairの梶茂樹先生にも感謝申し上げる。

2007年3月5日記す



①石川県白山市白峰
②新潟県関川村朴坂
③新潟県粟島浦村内浦
④長野県栄村屋敷（秋山郷）
⑤島根県西ノ島町赤之江
⑥島根県西ノ島町美田
⑦島根県海士町
⑧島根県知夫村郡
⑨大分県安心院町飯田
⑩大分県姫島村
⑪大分県豊後高田市香々地
⑫大分県豊後高田市払田
⑬和歌山県田辺市龍神村宮代
⑭和歌山県田辺市熊野（旧大塔村）

図１　調査地点

表1　GAJにおける「語幹の長い形容詞」

地点番号	地点名＼項目	137高くない	136高い（物）	141高かった	138高くて	139高くなる	142高いだろう	143高ければ	144高いなら
	新潟県								
4638.01	岩船郡山北町勝木	tako:nɛ:	takaimono	takakatta	✓ta:kote	tako:naru	✓ta:kɛ:ro	takɛ:ba	takɛ:ba
4647.69	村上市本町飯野	✓ta:konɛ	✓ta:kɛmono	✓ta:kɛkatta	✓ta:kote	✓ta:konaru	✓ta:kɛro:	✓ta:kɛba	✓ta:kɛndaba
4666.42	新潟市四ツ屋町1丁目	takakunai	takaimono	✓ta:kɛkatta	✓ta:kote	✓ta:kɛnaru	takɛ:ro:	✓ta:kɛba	✓ta:kɛndattara
4667.22	新発田市中曽根町3丁目	take:ne:	takaimon	✓ta:gekatta	✓ta:gote	✓ta:konaru	tagero:	✓ta:kɛba	take:nara
4675.45	西蒲原郡巻町大字巻甲	takanɛ	✓ta:kɛmoɴ	✓ta:kakatta	✓ta:kate	✓ta:kanaru	✓ta:kɛro:	✓ta:kɛba	✓ta:kɛgandaba
4676.57	五泉市本町2丁目	✓ta:konɛ	✓ta:kɛmoɴ	✓ta:kɛkatta	✓ta:kote	✓ta:konaru	✓ta:kɛro:	✓ta:kɛba	✓ta:kɛgandattara
4684.77	三島郡出雲崎町尼瀬2区	✓ta:ko:nɛ, nai	takaimono	✓ta:kɛ:katta	✓ta:ko:te	✓ta:ko:naru	takaidaro:	✓ta:ko:kattara	tako:nara
4686.51	南蒲原郡下田村大字荻堀	✓ta:konɛ	takɛ:moɴ	✓ta:kokatta	✓ta:kote	✓ta:konaru	✓ta:kɛrojja	✓ta:kɛba	✓ta:kɛba
4694.72	柏崎市東本町1丁目	✓ta:kakunai	takaimono	✓ta:kakatta	✓ta:kate	✓ta:kanaru	✓ta:kɛro:	✓ta:kakerja	takɛndakea
4695.46	長岡市栖吉町	✓ta:kanai	takainmono	✓ta:kakatta	✓takakute	✓ta:kakunaru	✓takɛ:ro:	takakereba	takainara
5604.28	刈羽郡小国町大字新町	✓ta:ka:nɛ:	✓ta:kɛ:mono	✓ta:kɛ:katta	takakute	✓ta:ka:naru	✓ta:kɛ:ro:	✓ta:kɛ:keba, keja	✓ta:kɛ:ndattara, -garattara, nara
5605.57	北魚沼郡堀之内町大字堀之内	takakunɛ	takaimono	✓ta:kɛkatta	✓ta:kɛkute	✓ta:kɛkunaru	✓ta:kɛdaro:, ta:kɛro:	takakeba	✓ta:kɛgandara
	長野県								
5624.84	下水内郡栄村大字堺字屋敷	✓ta:kakonɛ:	✓ta:kɛ:moɴ	✓ta:kɛ:kke	✓ta:kɛ:kode	✓ta:kakonaro	✓ta:kɛ:darazu	✓ta:kakkeba	✓ta:kɛandara
	同村屋敷（併用形）	✓ta:kɛ:konɛ:	✓ta:kɛkkɛ-, ta:kakkɛ-	✓ ta:kɛ:katta	✓taka-, ta:ka-	takako-	takɛkarazu, ✓ta:kɛ:bena:, -karo:zu	ta:kɛ, taka-, ✓keba,kereba, keja,kkeba,kkaba	ta:kɛ:, ta:kɛ, takɛ, ✓ta:kake, takake-, -andara, andaba, keja, dareja
	石川県								
5566.95	石川郡白峰村字白峰(GAJ)	タコナイ	タカイモン	タカカッタ	タコテ	タコナル	タカイヤロ	タカケレァ	✓ ターキャナラ
	同村白峰(新田による)	✓ta:konai	✓ta:kjamoɴ	✓ta:kakatta	✓ta:kote	✓ta:konaru	✓ta:kjajaro	✓ta:kakerja	✓ta:kjanara
	島根県								
5471.49	隠岐郡西ノ島町浦郷字本郷	✓ta:kækotonæ	✓ta:kæmon	takakaʔta	taka:te	taka:naru	✓ta:kæda:ra	takakera, takakerj	✓ta:kænara
	大分県								
7316.65	東国東郡姫島村三区	✓ ターコネー	✓ ターケーモン	タカカッタ	タコーデ	タコーナル	✓ タカカロー, ターケ	✓ ターカケリャー	タケーナラ, タカケリャー
7325.86	宇佐市橋津	✓ ターコーネー, タコーネー	✓ ターケーモン	タコカッタ, タカ-カッタ	tako:dʒi, タコーデ	✓ ターコーナル	タコ, タカ -カロー	タコ, タカ -ケリャー	タコケリャー

表2 LAJにおける「語幹の長い形容詞」

地点番号	地点名	38〈塩味が〉うすい	37甘い	40辛い	39塩辛い	21粗い	28赤い	20太い	24細い	22小さい	25細かい
	新潟県										
4638.43	岩船郡山北村大字大毎	AAMAI									
4647.69	村上市大字村上安楽町	AAMAI	AAME								
4648.42	岩船郡朝日村大字新屋			KAARE							
4658.42	岩船郡関川村大字下関			KAARE							
4665.87	西蒲原郡内野町字内野6番町								HOOSOI		
4667.33	新発田市泉町					AAREE					
4667.76	新発田市大字山内	AAMAI									
4675.45	西蒲原郡巻町甲			KAARE							
4684.77	三島郡出雲崎町石井町								HOOSOI		
4685.10	三島郡寺泊町上荒屋								HOOSOI		
4685.72	三島郡与板町南新町								HOOSOI		
4685.28	三条市西四日町			KAARE							
4694.95	刈羽郡北条町北条			KAARE							
5604.52	刈羽郡黒姫村大字折居字餅糧	AAMAI									
5605.57	北魚沼郡堀之内町旭町								HOOSOI		
5606.83	北魚沼郡湯之谷村大字大湯								HOOSOI		
5612.39	高田市大町3丁目								HOOSOI		
	石川県										
5566.95	石川郡白峰村字白峰	AAMAI	AAME	KAARE		AARE	AAKE		HOOSE		
	島根県										
5472.59	知夫郡西ノ島町赤之江								HOOSE	KOOMAI, HOOSOI	KOOMAI
6403.60	八東郡美保関町大字福浦								HOOSE		HOOSOI
	鳥取県										
6413.43	米子市糀町1丁目									HOOSOI	
	大分県										
7316.65	東国東郡姫島村北浦		AAMEE			AAREE		HUUTEE	HOOSOI	KOOMAI	KOOMEE
7326.41	西国東郡真玉町大字黒土中村	AAMAI	AAME			AAREE	AAKE	HUUTII			
7335.34	宇佐郡安心院町大字新原字峰ノ前	AAMAI	AAMEE	KAARE	KAAREE						
7335.93	宇佐郡安心院町大字寒水							HUUCII	HOOSOI	KOOMAI	KOOMEE
	三重県										
6567.79	鳥羽市神島町								HOOSOI		
6567.86	鳥羽市答志町							HUUTEE	HOOSE		
6577.86	志摩郡阿児町安乗							HUUTOI	HOOSOI		
6585.25	度会郡紀勢町柏崎								HOOSOI		
	岡山県										
6466.01	西大寺市西大寺							HUUEE	HOOSEE	KOOMAI	
	広島県										
6481.90	安芸郡蒲刈島町大字大浦									KOOMAI	
	兵庫県										
6458.26	姫路市飾磨区御幸									KOOMAI	
	岐阜県										
5568.22	吉城郡河合村羽根								HOOSÖ		
	福岡県										
7343.14	浮羽郡浮羽町大字小塩字小松堀						AAKE				
	熊本県										
7392.33	八代市日奈久竹ノ内町		AAMAKA								
	千葉県										
6710.55	市原郡南総町奉免								HOOSOKKEE		
6720.67	夷隅郡大多喜町小沢又								HOOSOKKEE		

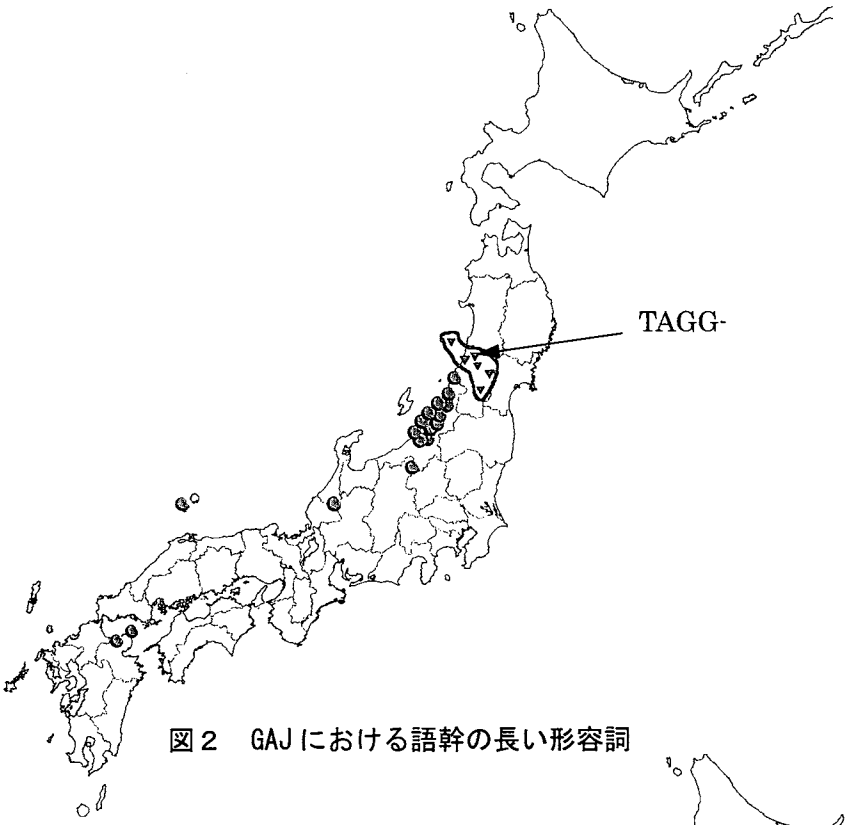


図２　GAJにおける語幹の長い形容詞

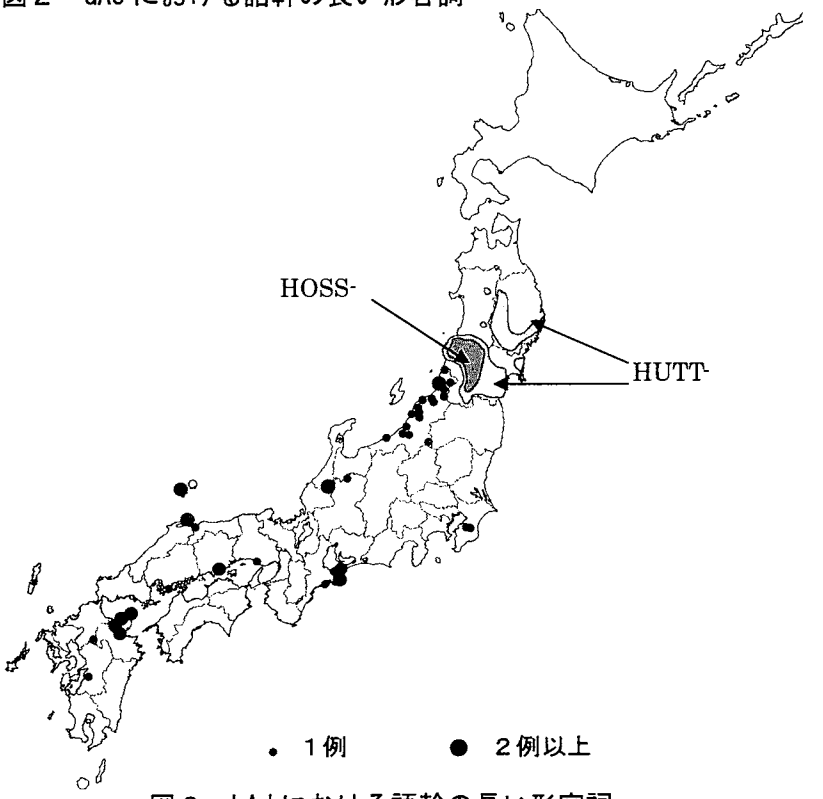


図３　LAJにおける語幹の長い形容詞

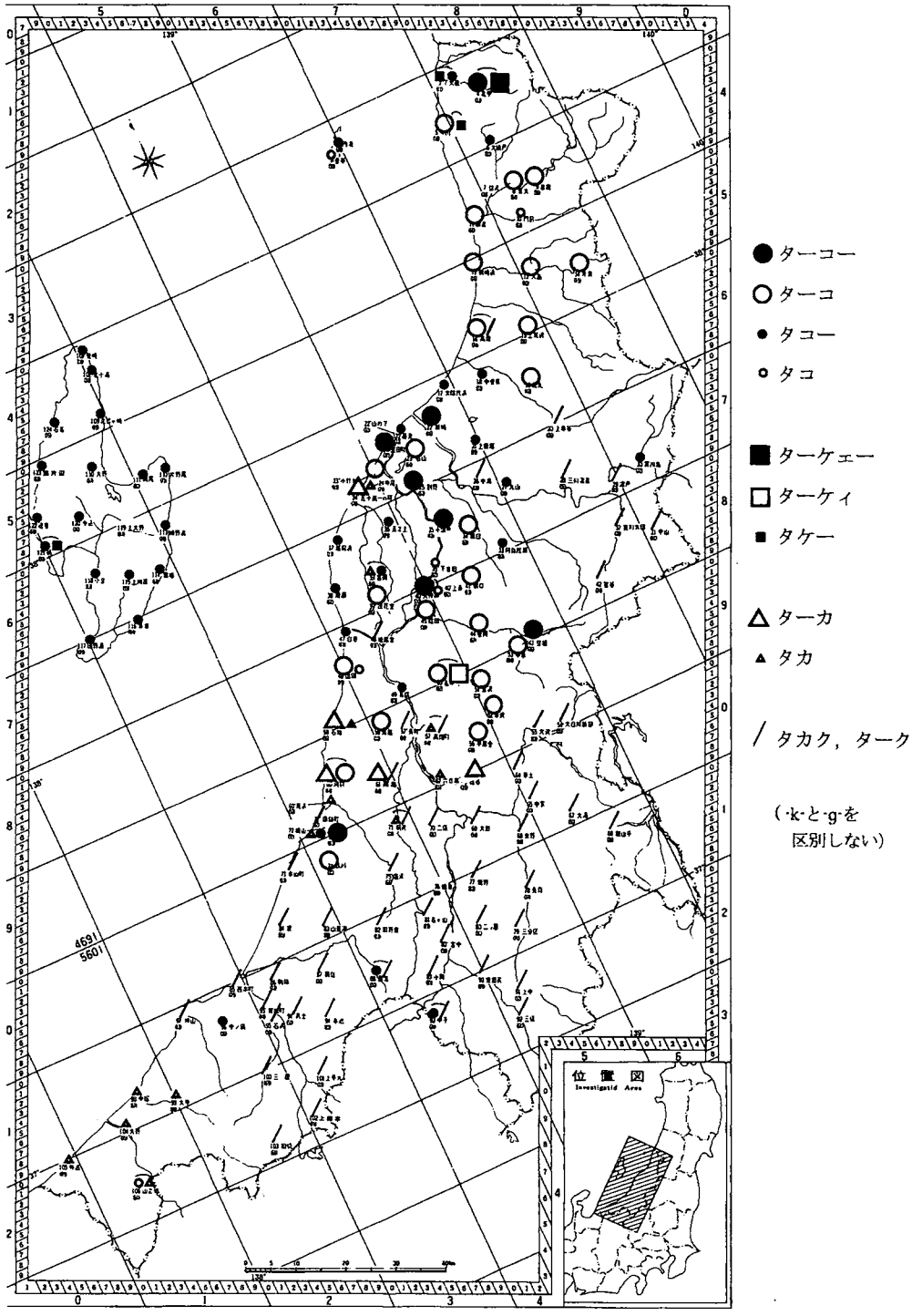


図４ 新潟県の語幹の長い形容詞 「高く-なる」の前半部
大橋(1998)『新潟県言語地図』Map27 を新田が書き換えたもの

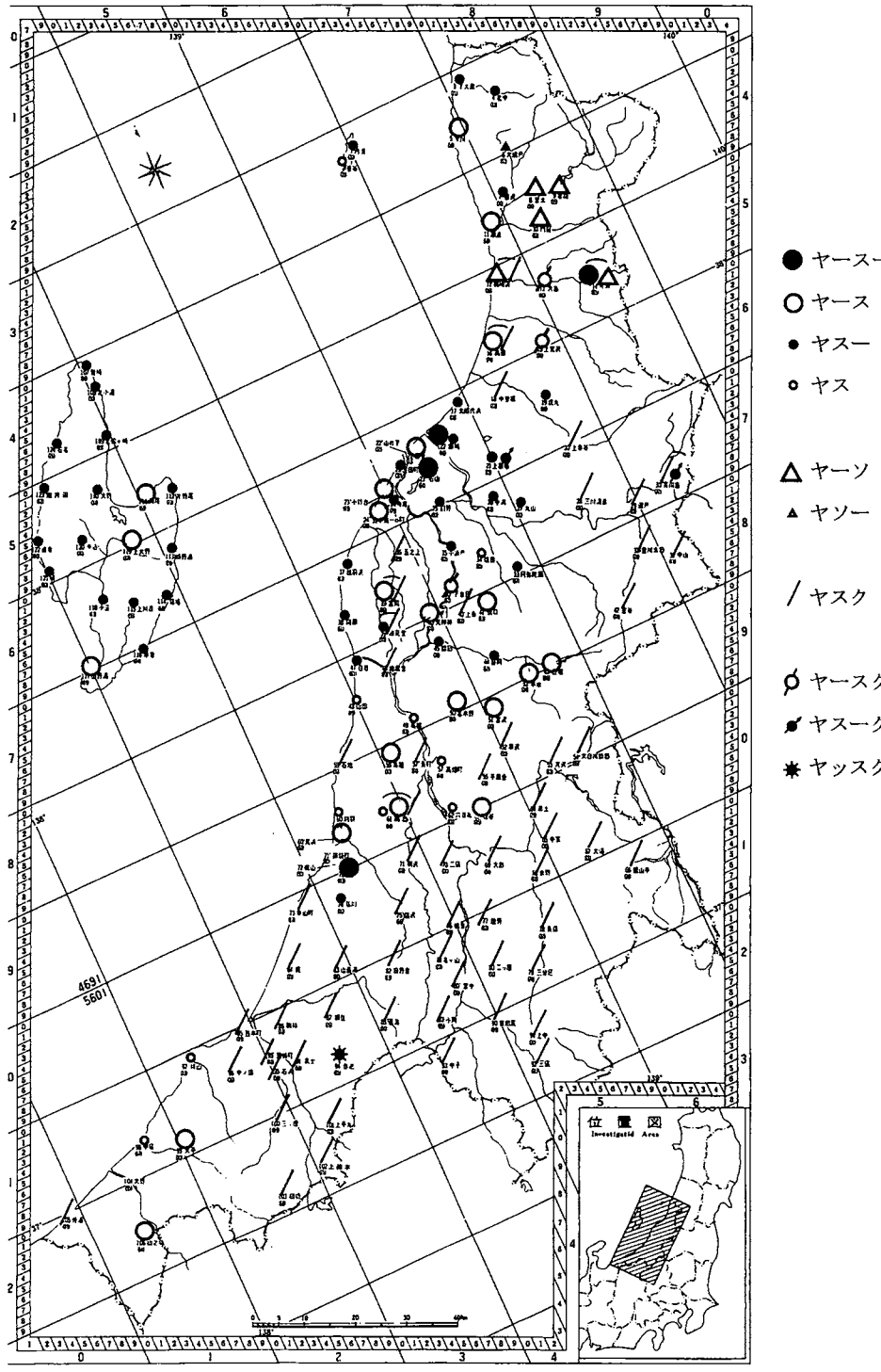


図５ 新潟県の語幹の長い形容詞 「安く-なる」の前半部
大橋(1998)『新潟県言語地図』Map28 を新田が書き換えたもの